臨附墨刷

明治三十五年一月廿日發刊

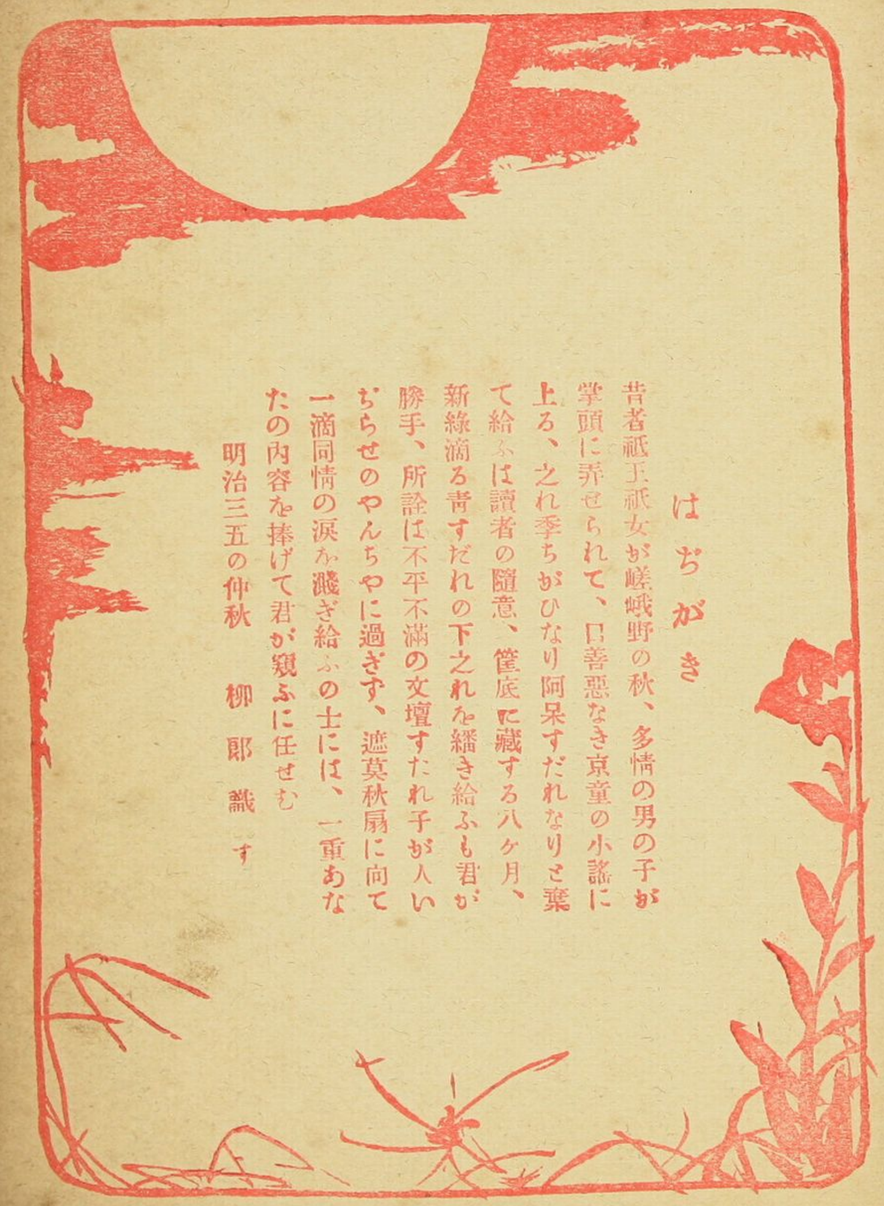
壽々夢詞　第十貳聲紀念

臨時增刊

壽々夢詞第十二聲

青すだれ

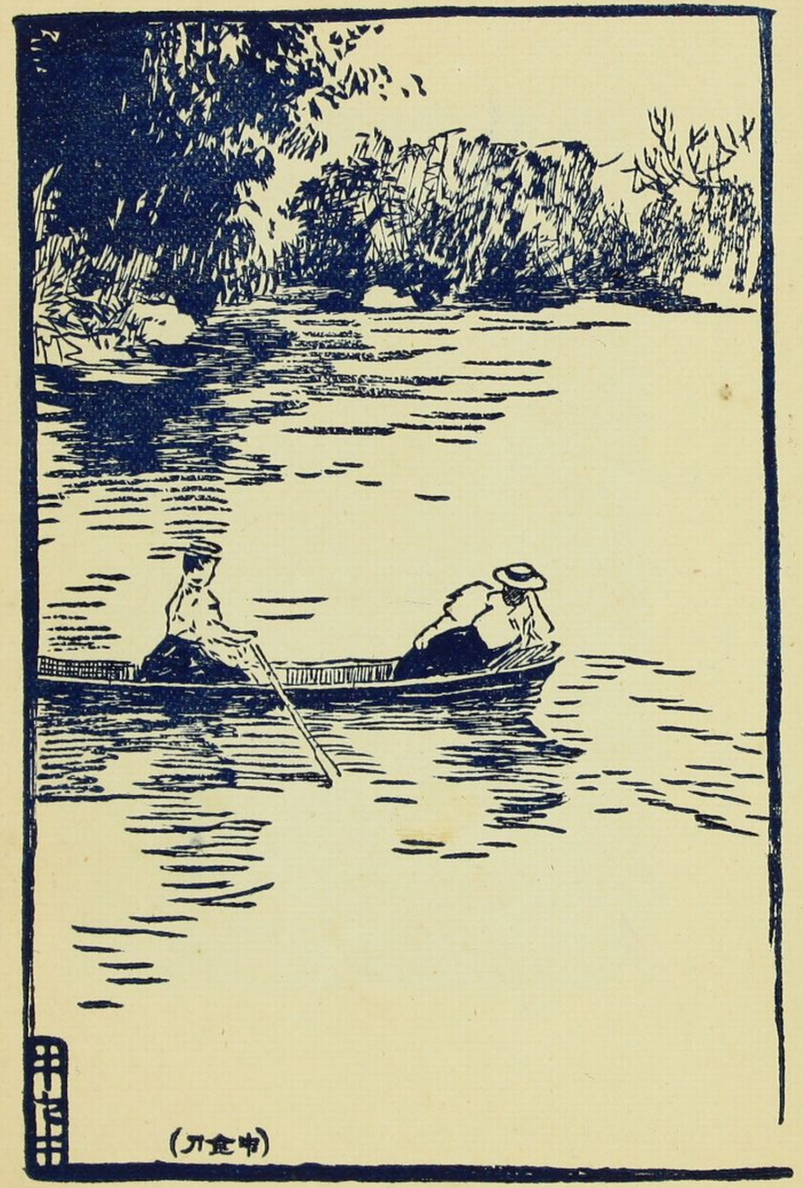
壽々夢詞會藏版



はぢがき

昔者祇王祇女が嵯峨野の秋、多情の男の子が掌頭に弄ぜられて、口善悪なき京童の小謠に上る、之れ季ちがひなり阿呆すだれなりと棄て給ふは讀者の隨意、筐底に藏する八ヶ月、新綠滴る青すだれの下之れを繙き給ふも君が勝手、所詮は不平不滿の文壇すだれ子が人いぢらせのやんちやに過ぎず、遮莫秋扇に向て一滴同情の涙を濺ぎ給ふの士には、一重あなたの内容を捧げて君が窺ふに任せむ

明治三五の仲秋　柳郎識す



(刀金中)

明治三十五年五月五日　（於前津小林可愛軒）

クレナイ斷絶會

End of the Magazine Kurenai.

寫眞の解

右よりの

一、橋の欄に腰打かけてさア寫せと腕組まれたの衛生盛大新聞社主幹小林淚蝶君

二、淚蝶君の後ろに諸君と視線を異にして我不關焉と口つぐんだのが壽々夢詞會主幹飯田楊柳子

三、楊柳君の前に眼鏡かけて腮に手を付けシガーの燃へ殘り を左手に襦袢の袖のはの見ゆるのが金城社主友清子

四、友清君の膝にもたれて破顔一笑頭髪を二ッに分けて足袋洗足なのが中京有名の文士たる天使の主幹高木蛙月君

五、蛙月君の後ろに腕組んでちつくりしたのが太田紅葉君

六、紅葉君の隣りに伸び上つて罷り出でたるはの御面相が青木麗花君

七、麗花君の隣りに一流のニューと首差出し何んでげすと云ひさうなのが山花庵小鳥大平君

八、山花庵君の前にしやがんで視線を蛙月君の破顔一笑に濺ぎ小天地所載の子規先生と云ふ見得が早川五學君

九、五學君の隣りに腕を懷ろへ差し込んでぐるぐ帶で肩へもたれ込んだ隨一の好男子故秋水の主幹中野清子君

十、清子君の体を支へて眉間の青筋あり〳〵行無さうに前垂れしめて前へのめり勝ちの當日の裏主北尾如洲君

但 川には礼無し

後ろの松に燈籠有り

ヒールはカブト、コップは一ッ

シガーは皆ピンヘットなり

牡丹は山花庵の惡戯に出したもの

壽々夢詞會作品目錄

表紙　書　立松輝石

緑蔭泛船　詩　同花東一佳人

淺間山噴火　詩　五味菱一洲

美人半面像　詩　亀山鐵幹

小魚戯清水　詩　亀山鐵幹

次

懐都賦　（一）　登坂北嶺
夏灯　（八）　山高雨聲
蕉窓漫語　（九）　沼波瓊音
濱名湖上囑目　（十六）　服部擔風
初夏即事　立松晴濤
初夏雑吟　（一七）　加藤月村
夏夕同賦　山崎柏隱
夏日遊寺　（一八）　竹本穂山
次擔風兄韻　福原周峰
緑蔭嚼氷諸　（一九）　小島烏水
葉櫻　（二六）　杉浦丁山
皷　（二七）　上田龍耳
關寺小町　（二八）　萬代花舟
遲鶯　（五一）　山地白雨
清境　（五二）　新田靜灣
緑蔭　（五六）　西澤菱雅
女サイクリスト　（五七）　大橋青波
五月雨　（七十）　黒部烏不關
八草嵐　（七一）　大島寳水
妾薄命　（七二）　伊藤天琴

短夜　（八四）　木村霞十
柳橋漫吟　（八五）　村瀬美胤
青すだれ　（八八）　飯田照子
實櫻　（八九）　増永徂春
夕靄　（九〇）　川村曲水
萍花　（九五）　神林時處
露の瓜　（九六）　友清友静
松風白波　（九七）　香取花舟郎
はた、神　（一〇三）　山高牛郎
祭日　（一〇四）　三宅梅園
鬼百合　（一一四）　増永煙霞郎
哀歌　（一一五）　中野紫硯
朝靄　（一一六）　石井不轉
捨小舟　（一一七）　山田松琴
青嵐　（一三五）　廣岡幽外
幕風　（一三七）　太田梅塵
さみだれ　（一三八）　立松松枝
浪の音　（一三九）　北尾如洲
夕顔　（一九〇）　尾崎冬二
濱播子　（一九一）　服部綾足

夏日偶吟　（一九三）　中川五竹
中秋賞月　横井蕉園
夢登富嶽　（一九四）　飯田楊柳
白蓮　（一九六）　石原一字庵
無絃琴　（一九七）　近藤雲外
掛香　（二〇一）　三苔落魂居
硯海小滴　（二〇二）　罪の子

青すだれ

楊柳編
山桃子補

懐都賦

われ郷に皈りて
竹に雨細き夜
涙多き詩人
秋の景色蕭條
板橋の枯柳
遠白き野川の畔

登坂北嶺

恨更に長し
惆悵として都を懐ふ
われ願はねど
たへずして眼霑ふ
枝もあらはに
千めは袖うら寒し

芦萩風にそよいで
ろよろは何か

われ今更に
昔これ風前の虹

さなり、男兒の意氣
往くに萬里

花落つる春の晩
越山の雲幾重

自然はやみに囁けり
茫たり、人生の歸趣

何か說かむや戀と名とを
覓むるに痕ありや

劍あるのみ
いづこにか關門あらむ

はかなきを觀じては
見放るにをもひ遠し

鳩の聲くもる
凉榻禪書を讀むに

劇しき葛藤は
萬丈の紅塵は

上野の鐘聲
不忍湖畔

夜、御茶の水を過れば
さ青き中に

若葉のかげ
耐へずして京の旅

好しや、涙を酒さんに
埋むるに薄からず、五尺の身

暮靄をうごかすとも
說かむや、何の無常

電燈たかし
輝くは功名の影

戰鬪の勇士
叫喚の悲鳴

理想とは
道なき荒癈の野

咀はんは罪か
神たるを得ずんば

血を啜る祭壇の夕
嬉々たる其こゑ

闇に車を驅つて
大路をとよもす

壞らるゝものゝ謂ゞ
そこに何の罪惡あらむ

あらず、人もし
即ち魔のみ

大風起つて幣四方に飛ぶ
嗤ふか、人間の小さきを

湯島祠頭
胸の活火は滿都を燒かん

無限の慰藉は
運命の毒手はわれを拉して

知己なし朋友なし
思はじとはすれど

鎭守の老松
煌めける一ッ星

夕日に向つて血を吐く三斗
卓犖氣を負ふ男兒の粹

たゞそこに在るを
あゝまた故郷に抛てり

零丁として獨り迷ふ夕
いかにせむ、誓を背きし人

雷に折れし片枝凄く
夜な〳〵のわが友

人情の眞はやぶれたり　自然の美はけがれたり
あゝいづこにか　田園の樂あらむや
幽靜や閑寂や　われの刑具なり
青山や白水や　われの囹圄なり
机上一輪の菊　淸香筆の林に漲る
人はとふ、蕭散の氣　君陶翁を慕ふかと
知らずや、滿腔の悲憤　鬱結して散せず
姑く枯淡の生を裝ふて　しひて世を閑却すとは

夜いたく更けて　いよ／＼眠を成さず
荒籬の細蛩　泣くもまた秋
境靜かに竹たゞ婆娑　燈明かに雨たゞ霏々
頭を回らせば懷ふこと　いよ／＼切なり、東の都』

鈴むしの聲ふりかわく淺茅生に　正白
平家語りし人消ゑにけり　几董

夏灯

山高雨聲

萩植て簾涼しや夏灯
水打つて葉に花に風牡丹哉
無花果のくらき若葉や五月雨
夕顔に明けの曇りや郭公
心太一樹の風のひやゝかに
蜘の巣に五月晴れたり花柘榴
加茂川や京に住ひて絹袷衣
鶯は老ぬ孔雀の羽抜鳥

蕉窓漫語

瓊音

『俳諧二十五箇條』に

晨明に句案なせば佳句ありと、翁其角嵐雪など同意なり、されば定家卿東雲引くころ起出て束帯して案じ給ひしよし、都て行住座臥心掛けずしては至り難し

となり、朝は清淨なり、夜は汚穢なり、されば朝の心は神にして夜の心は魔なり、故に古人この神の心にならんが爲めに朝案ずるをよしとなせり、今の作家全くこれに反す人寢靜まりて後筆を執り、瘴霧の如く濁れる空氣吸つゝ、折々冷ゑきりし鐵瓶の水に咽をうるほしマッチ火にて煙草くゆらし麻のやうに乱れ乱る、腦を絞りて書きつゞりく、東雲の引

くころ筆を止め、雨戸明放ちて初めてこの世の人となるなり、道を得ざるものならずやと問へば、作家答へて曰く、今の世は魔なり、魔を寫さんとすれば先づわが心を魔にせさるべからすと

『愚癡問答』に、

師曰く風雅はもとより愚癡なるもの、七情より出るもの、云々其七情といふものを、つく〳〵と考るに、もとより愚癡なるものなればなりとあり、情は愚なり、愚なるところ即ち情の美なるところなり、情の發したる者は詩なり、詩の愚ならざるものは詩の妙なるものに非す、政治家に賢人多し、商業家に賢人多し、道學先生に賢人多し、故にこれ等の輩に詩を解するもの少きなり、

『其傘』に

有文無文といふ事あり、

無文とは、花をたへなりといひ、月を明かなりとかくれなく云ひあらはしたる姿なり、

有文とは、月のあきらかなるを、それといはずしてあきらかに聞ゑさせ、花のたへなるをも、さよと思ふやうに、句の樣をいひ殘して作りなすなり、

とあり、句は最短詩形なり、されば句其者が既に有文的なり、無文の句ほど腹立たしきものなし、古文學に就てこれを見るに、源氏物語は無文にして、枕草紙は有文なり、清少納言はかの時代に於て俳趣を解せし唯

一の詩人なりき、

『俳懺悔』に、

活々坊いへるは、御徳の詩に、俳の魔心といふは、人の師にならむと思ふ故なり、此疾にて修行半途なり、いつまでも人の弟子たらむと思ふべしとあり、善哉言や、懸賞俳句に一二度當選すれば、其賞品を書齋の人に見られ易き所に飾り、戒名のやうなる名をつけ、太祇は、蕪村は、と囀る、『かたはらどころか兩腹が痛いや』とはこの事なり、柳樽に曰く、唐詩選讀めば孔雀の尾が欲しい、と、

『種茄子』は茶靜の句集なり、佳句多し、

青柳の人ほゝげなる眞晝かな
立たればなくなる春の寒かな

『小君』は宇橋の句集なり、宇橋茶靜と友としよし、風骨また相似たかる〳〵と巣のなき蝶の往來かな
往來を酒の香の一月哉
どこからか扇のうつる若葉かな
矢一すぢ射らんであるや夏木立
けふの用仕舞うた人の巨燧かな

この風骨、わが最も好むところなり、二月の趣は甚だ描き難きものなるに、『往來を酒の香』といひたる、寫し畫したりといふべし、若葉の句見るが加し、夏木立に矢をあしらひたる蕪村風なり、わが知る人の歌に、けふの事けふなし終へて安らかに結ぶ夢ころ命なりけれ、といふがありしが、この巨燧の句と比すれば、無文の至極にて見る影もなくなりぬ

り、其異なれる点を指摘せば宇橋は茶靜よりも健かにして、茶靜は宇橋よりも穩かなり、集中の佳句を擧ぐれば

西院の太皷東寺の皷雪解る
夜をに椙梅が香乾く草鞋かな
春の水烏は山へかへるなり
駕籠に小兒の春風見ゆる寢がほ哉
雨かちに雛も過ぎ行く山家かな
胸うつや花見ゑそむる鞍の上
花の嵯峨蚊遣の嵯峨と老にけり
秋風の今朝ふく寺の疊かな
盆過の鐵砲悲しいとすゝき
遠山は露に沈て柚味噌湧く

駒形や柄先に立ちし鉢たゝき
紙衾耳なし山とすくみけり

一言一句皆牢として動かす、健なる哉、雪解の句明治ッ子に歡ばるべき姿なり、春の水一句ほろ〳〵として靜趣最も愛すべし、兒の寢がほも可愛らし、鞍の上に胸うちたる古武士の風情勇まし、柚味噌湧く音のこれに反して細やかに翁さびたるも嬉し、紙衾耳なし山はすくみけり、我殆ど病的に斯る句を好む、同感の士ありやなしや

ひよ島の毛衣ふるふ月更て　百池
我ひとり乘る舟を待けり　鐵僧

濱名湖途上

服部擔風

海色湖光一劃分、　車如奔馬人氤氳、　山開粉本明于画、
唇吐樓臺幻作文、　縮地鏡中疑有路、　御風天上欲無雲、
扁舟誰把釣竿拂、　十丈珊瑚紫夕曛

福原周峰曰、骨氣奇雋、詞彩華麗、通首得其婉愜而雅健矣、

即事

立松晴濤

天來妙句使誰聽、　讀罷瓣香心地靈、　什襲縹緗多古色、
帳中秘是曝書亭

服部擔風曰、實事有趣、是得俊於曝書亭者、

初夏雜吟

加藤月村

梅子全黃欲亞枝、　出門誰把綠蓑披、　詩甘煙雨窮愁字、
避人風波平地時、　吏輩何堪老刀筆、　江干只合養魚兒、
最難成就參禪業、　依舊蒲團是我師

服部擔風曰、前聯頗有湊泊之妙、後半亦足可尋味、

夏夕同友人賦

山崎柏隱

竹氣濛濛水遶籬、　黃昏迎客捲簾帷、　可憐螢火出深碧、
正是庭階雨過時、

服部擔風曰、螢火深碧、不遜漁洋、詩不點一涼字、而涼意直透人心脾

夏日遊仙嶽精舍和松荷禪師韻　竹本穗山

來敲雲版爲吟哦、　涼碧爽藍仙壽阿、
露珠吹散滿池荷　幽磬聲中午風動、

服部擔風曰、深秀高雅、庶幾乎厲太鴻之口吻、

次擔風兄見示韻呈政　福原周峰

擔滴臥聞琴筑同、　雷公擊鼓破冥濛、
桑戸蠶成打甚紅、　宿搆搜腸無至妙、　稻田雨足分秧綠、
荷花生日又將近、　報道故人郵致筒　偶拈得句自然工、

服部擔風曰、對法精妙、朱竹坨之所喜

緣陰嚼氷話

烏水

櫻島大根

薩摩鹿兒島灣内の櫻島は周迴八里餘、嶋といへど實は一箇の火山なること、伊豆七嶋に類す、詩人ろの秀色を賞へていふ『鹿子城中家幾萬無窓不容紫脣顏』と、鹿兒嶋よりこの山を望むは、猶水戸市より筑波山を仰ぐが如し、たゞこれの彼に比して距離甚だ近きのみ、此嶋中に生育する所謂櫻島大根は、その大サ三尺以上の物あり、重量七八貫目を上る、此大根二本を以て馬一駄の積量とそるは、古來の習慣なりといふ、然れども味は美ならず、只だ形容大なるを奇として、往々大阪市街の店頭に陳列せ

らるゝを見るのみならす、時に割烹店又旅宿に於て膳に上すことあり、然れとも之を他鄕に移植するときは、次年より形漸く小に、年を經るに隨ひ、尋常一樣の物となる、尾張の宮重大根、武藏の練馬大根と併せて天下の三大根と稱すべし。

黑　百　合

加賀白山に黑百合あること、人其名を聞かざるものなく、而して其實を覩たるもの極めて稀なり、余が親しく視たるは、六瓣にして、黑といへど實は濃紫色なり、且つ白色の班點あり《或は無きもあるなるべし》一莖四寸より八寸に至る、普通の百合に比すれば短小なり、根に小百合を結ぶ、この百合に就ては近頃泉鏡花氏、同名の小說を著はされ、遠くは

眞書太閤記などにも出でたること、人皆よく之を知らむ。

俗　謠

飛驒越中の境界、万山波濤の如く重疊せる間、庄川といふ川ありて、その涯に俗稱五箇村といひ、平氏の末葉のみを以てまとゐせる聚落あり《肥後の五箇庄を混する勿れ》其村民今猶モギヤ節と稱する俗謠を唱ふ、其一にいふ。

烏帽子狩衣豚ぎ捨て、
越の深山に杣通ひ

古雅愛すべし。甲斐天目山の下、諸村の童謠として今猶存するものに曰く

わらが國の殿きまは

あの山影でれ打たれた

と悲愴骨を刻す、天目山の央詩を作れるもの、狙徠南廊の徒ゆれども、この天眞に及ばざること遠し。

山國の雪

飛驒國莊川は、年々の積雪壹丈に及ぶ、明治二十二年雪極めて微にして、薪炭を運搬せんと欲するも、橇を牽くに力を勞すること酷だしく、徒に肩を傷くあるのみ、是の如きは二十年來の異象なりと、同國乘鞍嶽の鑛山より銅銀を輸するも、雪なきときは又運輸に不便なりと、されば山國の大雪は、平原人士の想像ある如くには、惡しからざるなり。

胡桃

酷寒の地、もしくは川岸には、胡桃を植うべし。いかなる瘠惡の土壤と雖も必す繫殖す、北海道に胡桃の多きもこの故なり

漆

畦畔に杉檜の類を植うるは、をこの沙汰なるべし、樹生長繁茂すれば、稻はろの影を浴ひて日を避くるゆゑ、發育を害して収獲を減すへく、樹木の價のみにては之を償はむこと難かるべし、關東にては榛の樹を植う、此樹最も水濕沮洳の地に適し、皮を剝きて染料に用ゆるを得と雖も、未だ漆樹の利多く損少きに如かす、かくて相摸小田原近在にては、年々漆苗を植う、最もかしこき子段なりといふへし。

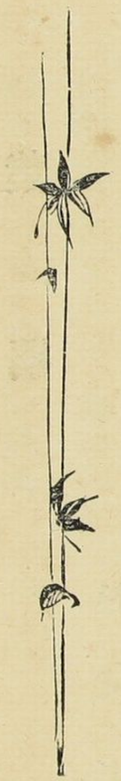
籠渡し

飛驒の籠渡し、これまた名のみ聞きて、その所謂籠とは、いかなるものか、いかにして之を渡すやを知るものは尠かるへし。

籠渡しは對岸の、岩石高く水面甚だ低く、川幡廣く、之を望めば水は霧濛々として辨せさる程のところに架するものなり、其裝置をいかにといふに、先づ對岸に堅牢なる力杭を打ち建て、野葡萄の蔓をもて、太き繩となし、凡二尺廻位とす。而してかの力杭に結ひつけて、彼方より此方へと張り掛く、之を命綱といふ、猴藤をもて丸く四筋立とし、其下に人の乘るへき程の籠を造り附て、命綱に釣懸け、其籠の前後に綱を附け、兩岸に引張て引綱とせり、是を渡る人は籠の中に立つて、彼の柱藤を左右に搖ひ込み、其軀を堅め、ブランコの如く前後に振り動かし、兼ねて

携へたる藤の蔓の輪を前の命綱へうち掛け。手繰りてズル〳〵と進みゆくなり、其命綱は三十間、或は六十間餘、之に乘れる人のさまを傍觀するに、氣沮み膽落つといふ、土地の人は慣れたればにや、さほどにはれもはず、飛驒越中の境にありたるもの、明治四年之を廢せり、されば勿論余も乘りたることはなし、小野湖山翁の詩にいふ。

北州行盡幾多山　臨渡旅魂殊冷然　身在一繩蒙勺引
籠懸三索更蹁遷　只疑碧落跨仙鶴　絶勝鯤溟乘釣船
知是千翠巖底水　劃分飛越兩交邊



葉櫻

杉浦丁山

葉櫻の垣根小闇し五月雨
橘の香にたそかれぬ青簾
色砂を蹴立てゝ騎射す蹄哉
陽炎や庭の牡丹の晝閑に
月にして冷たき思ひ青田哉
草庵や烏雀のあけやのし

皷

上田龍耳

古き世の皷うちけり杜若
短夜や浦島が子の箱の蓋
紅顔の眉あげて騎射の逸哉
藻の花の五月雨れてのみ野川哉
夜の帳に竹の疎影や時烏
橘のかやりくもりや夏の月
蝙蝠や月になり行く古都の夕
蓼嚙めはからき我世や戀涙

關寺小町

萬代花舟

五月雨の、或る夜晴れたり。

『母様、私はね、斯う來る日も來る日も雨天なものですから、何だか氣が滅入ちまつて、寧そ、出家にでもならうかと思ふので御座いますが……。』

れ納戸と黒の棒縞なる裕衣に、絹の兵兒帶締めて大島袖の袷羽織着たる、十八計りの優しく美しき青年は、突如として謂ひ出でたり。

呉竹の根岸の里の、老ひたる杉ひさかたの空を突て、樫の木低く茂れる上野の山つゞき、往來絶へたる小路高く、其の國と其の家は瞰さるゝなり。闇なるに小篠の生垣を彼方なる庭木の葉、雨に濡れて緣滴る許りかところ〴〵、能くは斯うは見ゆるな。さるは雲の途切れより嚴かに輝く星の光に照されてか、遠く障子の腰硝子を洩る燈の、打ち重なる梢の間よりチラホラと内や床しく一入の眺めかな。

心ゆくばかり見入りたる卅五六の女、尙ほ色香めでたく、艶なる髮は夜會に結ひたり。派手なる裕衣に糸織の袷羽織れるが、駕ける樣して此方を振り向きつ。

『道さん何だとね、出家に成りたいつて。

『はあー。』

女は果きれしとやう目を瞭りたるが、慌忙て。

『其樣こと謂ふものぢやありませんよ、本統に意氣地が無さ過ぎるわね、十七や八の身空で始終詰らない事を考へてさ、忡々してちや詮方がないわ、ちと氣を大きく持て下さいなね、　萬一道さんが甚麽しても出家になりたいなんてれ謂ひなら、私や最う生きちやゐませんよ。』

『其樣こと、出家なんかになつて堪るものですか、冗談に謂て見たのでございます、』

『其なら宜いけどね、平常が平常だからッヒ眞實にもするだらうぢやないかね、是からは其樣こと曖にもいふのぢやありませんよ。』

青年は只だ優やかに首肯ぬ、女はヒタと寄り添ひたり。風其の袖をあほるよと見れば。

『這麽可愛い子を、甚麽して出家なんかに。』

と許り、白き〳〵手男の首に絡まりぬ。定めなき空は又も全く雲となりて、細雨蕭々たり。女は施て燈火梢をもるゞ指しつ。

『ちよいと本統に寄麗なこと、毎日降り籠められてるものだから、道さんぢやないが隱人しちやつてたのよ、其が久振に此處まで出掛て、私氣が晴々してよ、れ前さんは猶且物ばかり考へてれ居でかい。』

青年は首を振りて否らず。

『れほこここ、此子はマア幼兒だよ、彼樣眞似してさ、時に私はぬ、今偶然斯うゐふ事を思ひ出したのよ、アノ家の燈が庭木をもれて見ゑるだらう、ホラねッ、何だか中がしのばれるぢやないかね、だがら設し人

が此路を通つてさ、内で私が三約でも彈してたら、屹と何だよ、差し向ひのれ樂み筋位るに思つて、是非畜生ッ……。』

我と我が口を押にて。

『……とか何とか謂ふだらうねに、にッ道さんは爾う思わなくつて。』

雨さと降り來りぬ、二人の姿見にずなれり。後は靜に〳〵只だ上野の鐘の寂しく鳴る聞ゆ。

内には、忽ち三絃の音起れり。

❀　❀　❀

『……月の雲井の御方をフッと、見染て戀ひ焦れ明日をも知れぬ老の身で佛三昧すて置て後生の爲めの念佛も結ぶの神に手を合せ……』

調子稍々高き糸の音、忍びて唄ふ聲は、人に何をか迫るやう、美しき物の響かな、されど青年は耳傾けむともせず。

『母様、マア三味線も面白うございますけれど、鳥渡れ願ひがあるのですから、れ止なすつて下さいまし。』

『アラ不可いねに、此關寺小町は私の……其の御自慢なのだから、モウ一枚辛抱して聞て下いさなね。』

『だつて始中終聞くぢやありませんか。』

『れほこここ爾うだつけね、ぢや止しますから私の前に差向ひに座つてれ呉れ、ア、爾うで貴郎何か御用でござゐますか。』

忌はしげに眉を潛めて。

『不可ないや母様は、れ酒を飲むと何時も貴郎だなんて、妙に仰あるのだもの。』

『ぢや道さん何だね。』

『何だつて、アノ、母堂は私を道さんとれ謂ひでせう、而してれ京の事はれ京とれ謂ひでせう。』

『ハァ道さんは道さん、れ京はれ京と申します、其に不思議は少しもないぢやないか。』

『不思議は決してありませんさ、不思議はありませんけれど、私を道さんなんて謂はないで、矢張道之助といつて下さいまし。』

『何故よ。』

『何故つて、道之助と呼び放しに謂つた方が善いかと思ひます。』

『可笑ねい、突然に其様こと。』

『其が當然でさアね、少しも可笑ことはありません。』

『をや私をれ柳と謂てれ呉れ、爾うすりや私も道之助といつて上るわ。』

『そりや無理です、嘘にも其様馬鹿なことがいはれるものでございますか。』

『れほここと、冗談だよ、併し道さんといつたつて宜いぢやないか、世間にや幾らも例があるんだもの。』

『けれでも私、何だかれかしく思ふので御度ゐますから、願ゐ道之助

と仰あつて下さい、此間もれ峰ちやんの家へ往たら、伯母さんが變な事謂つて……。』

『變な事つて、甚麼噂してたの。』

顔色變て、膝少し進ませて、れ柳は容易ならぬ目の光、はづみたる息も忙はしく詢ねたり。道之助は謂ひ淀みたるを更に躊躇つ。

『どんな噂つて、アノ、何でもありやしませんのさ。』

『宜ござんずよ、本統に道さんは人が悪くなつて隱し立て許りするのだもの、口惜いつちやありやしない、是からば願か毎日でも峰ちやんの家へ待てれ樂しみなさいまし。』

『……』

首を垂れて物謂はず。

『ちとれ惚氣でも承はらうぢやありませんか。』

『峰ちやんなんぞ大嫌いです、此間は伯母さんの御機嫌伺に、詮方こと無し往たのです。』

『れほどこと、伯母さんが大きに難有うと申しましたよ、昨日裏の垣根で峰ちやんと嬉しさうに何か話してゐたのは誰か知ら、ゑッ道さん、あれは何處のれ方でござゐますよ。』

道之助の白き顔、さと染れり。

『あれは、母樣のやうにいはれると、私や實に困つちまうのです、全く峰ちやんが御誓古の歸りだつて、裏の生垣の外を通つてたでせう、私

や又三島神社の方から此方へ遣て來てたのですから、ばつたり邂逅して了つたのです、而して私に近頃ば何故學校へ往かなゐのだの、れ京さんは甚麼したのだの、いろんな事を聞くのでも、大きにれ世話だ、學校へ往かなからうがれ京が甚麼せうが、何も峰ちやんの知つた事ぢやないと思つたけれど、豈夫劍突も喰されないから、宜ゐ加減な挨拶して遣た丈です、別に其の甚麼もしや仕ませんよ、隱し立てと謂や母さんこそ、能く包みかくしをなさるぢやありませんか。』

『何ですと、私が能く包みかくしをずるつて。』

『なさいますとも、第一れ京の事たつて、私には少しもれ話か無いぢやありますんか、ゑッ母さんれ京はマア甚麼なすつたのでおざいます、

市村座へ往た一昨日の朝までは居ましたか、其から後といふものは、影も形も見せないぢやありませんか、幾ら詢ねても知ぬ顔をしてゐらつしやるんだもの、私や心掛りて堪らないんです。』

下女湯より歸りて寐たりけむ、臺所の方音もせずなれり。廣き家の中只だ二人、夜もいたく更けたるを外には五月雨のしめやかに降る聞ゆ、世界岑と寂しかりき道之助は一度噤みし口を開きつ。

『ゑ、母様れ京はムァ甚麼したのでございます。』

目を瞑り少し上ゐ向て、れ柳は思案の樣なりし、程經ちて。

『れ京かい道さん其を聞て甚麼するの。』

『甚麼もしやしないのだけれど、妹の事ですもの、少しは氣にも掛ら

うぢやありませんか。』

『ぢや教て上るよ、アノねえ京は新橋へ出しちまつたのよ。』

『新橋へ、アノ藝妓にー。』

『ハアー。』

れ柳は事ひなげに答へたりけるも、問ふたる道之助の聲、顫へを帶びたり。

『其では、とうど藝妓にしちやつたのですか。』

『未だ一本にや六ケ敷と謂ふんで、半玉に出しましたのさ。』

目をうるまして、膝押し進めて、屹となり。

『母様、何故藝妓なんかにしたのでございます、可哀想ぢやありませ

んか、其も食うに困るとか何とかいふのなら、又仕方が無いといふことも、ございますけれど、今の處生活に差し閊にると謂ふのぢやなし、世間の人に畜生の如に蔑視される者にするには及らぬぢやありませんか、第一黄泉のれ父さまにだつて、濟ぬ事だと思ひます。』

『れほこと、大層な理屈をれ謂ひだね、けど道さん、私だつて元を洗へば藝妓よ、本統に藝妓ほど氣樂で、面白い商賣はありやしない、何の人間は五十年と安く相場の付てる壽命だ、固氣な娘でれ嫁に遣て苦勞の中に年を老らせるよか、世間晴れて好な眞似して、樂しめる稼ぎを爲すのが兩爲めと謂ふものだわね、現在私の腹を痛めた子だもの、甚麼して悪い處へ遣るものか、其や成程道さんのれ謂ひの通り、暮しに困るやう

な事も無いけど、餘分にゐ金があると謂ふぢやなし、此儘では彼の娘を立派な内へお嫁にやるといふ譯にも往かないぢやないか、だから藝妓にでも仕て置けば、宜い旦那がついて、今に潛上の玉の輿で、高家の奥樣にもなれらァね。』

爾う謂や爾うかも知れませんけれど、昔とは何も彼も異つて六ヶ敷世の中では御座いますし、隨つて藝も容貌も圖抜て居なくちや……殊に此頃の藝妓は、娼妓と同じだとも謂ふぢやありやせんか、設し一生泥足が抜けなかつたら、本統に可哀想だと思ひます、又這麼ことといふと何ですけれど、ゐ峰ちやんも叔母さんが藝妓にするつて謂ふから、私や種々理を盡して止めたのでございます、當人も否だといつてるものですから、

散々止めたのだけれど、叔母さんは必ず遣るつてるさうでおざいます、私や何故マァゐ京もゐ峰ちやんも、同じように薄倖な身に生れたのだらうと、か、悲しくてなりません、叔母さんだつて何も、峰ちやんを藝妓なんかにして、死だ叔父さんの顔まで汚さなくても、宜さ相なものだと思ひます、ろれに

『ア、五月蠅よ道さん、モウ其樣こと謂はないで置て下さいよ、人ッ面白くもない、可愛い一人娘をよ、而も本の子と謂ちや彼の子だけなのを藝妓にしちやつてさ、水臭いこと謂ふやウだが、私の爲めにや繼子のお前さんと期うしてるのだから、些とは其處の所を察して吳たつて宜いぢやないか、それだのに二口目にはお峯ちやん〳〵つて本統癪だよ、お

前さんの考にでは幼縁とか何とか謂つて、峯ちやんを女房みたいに思つて居るのだろうが、叔母さんには繼子だし、内の暮し向きも宜くないさうたから、甚麼したつて只だぢや置ないわね、何時までも坊やでゐてれ呉ぢや困つちまうよ、お京を出す時も出した後も默つてゐたのは、皆私の胸にあるこつたから、今謂はなくとも、少し經ちや自づと判つて來わね。』

道之助は悲しうなりて、涙ろと拭ひ、洋燈の火影を眩しとやう、俯向きたり。お柳は獨り酒をあほりぬ。雨小歇なく點滴簾を還る音、時計の分秒を刻める響き、世界の寥寂さを僅かに破れども、此夜のさびしさは深かまきりぬ。空氣も太く冷かにしめりたるを、風の音外に起れり。

いろ〳〵の事皆胸に疊みて、氣悖れなしたる口に何をも謂はぬ、俄かに打ち萎れて泣きもやすらむ彼方少し向きたる姿、折々鼻さへ歔るにれ柳は遐がいたましく、氣を折れたり。

『道さん大層なふさぎぢやないか、尤もお前ちんの謂ふ事も一理あるのだけどね、先にも謂つた通り其處には其處の譯があるのだから、今少し目を瞑つて、下さい、爾うすりや、決して悪かしないから、ねッ。』

只た默して言葉あらざるに、お柳はつと膝進ませて、後より肩に手をかけて、白き道之助が顔の眞近にぞ、醉ひくる顔の美しう紅せるが並べり。ほゝと許り搖ぶりながら笑ふたる、尚ほものゐわざるを、此度は手を把りて。

『道さん、私が餘り謂ひ過ぎたものだから、又氣が結ほれたのだらう、願か堪忍して下さいよ、是も何かの約束事だと思つてね、私や道さんが斯うお塞ぎだと、モウ甚麽しようかと堪らなくなるのよ、其を知りつゝ彼樣こといふのも、猶且その何だから、全く因果とでも諦めて下さるな、其の替り屹と、今に今といふ譯にも往かなゐけど、お前さんの好な峯ちやんと一緒にして上るから、それまでは嫌だらうが、斯うしてゐて下さゐなね、後生だから。』

深き〳〵思ひにや沈みけむ、道之助は物謂はず。手をさと引て唯た眉毛ぬれたる目を瞬ゐて貌を瞻げて、うなづけり、お柳も雲時物案じ顏なりしが、又嬉しげに打ち笑みつ

『少しは藥だから、一ッ甚麽だね、氣が引き立て宜ゐよ。』

押し付られたる盃、否み兼て、顏を顰めて、二口三口に飲み干したり。

置時計は一時をうちぬ

『モウ、一時でござゐますよ。』

『オヤ、早や一時になつて……マア宜いやね、今晩は夜一夜飲うぢやなゐか。』

『だつて私は、最う少しも不可ますんから。』

『苦しくなりや、私が介抱して上るわね、飲める丈飲で御覽な、爾うしたら少とは氣も晴れるだらう、酒は百藥の長とも謂ふぢやなゐか。』

重ねて酌ぎたる、されども道之助。義母の心を量れば悲しさ遣る瀨なく

、はづかしさに獨り思ひ撞るゝ人の上、可愛しき義妹お京が事を案じては、そゝろ涙に揑き上げつ、もの謂ふも厭はしきを、何とて此上酒を強とも受くるの勇あらむ、母眠るを待て私に家を出で、靜に物を思ふて心置なく泣ばやと、お柳の寢るを一向願ひつ、腕拱きて盃突き遣りて　ほと吐息せり

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

悲しき運命ばかり、何時まで身に憂り付くらむ、現つ心にも知らざる幼き頃慈母を失うたり。政黨一方の領袖として花岡豁の名天が下にかくれなかりし、父の逝り給へるは歳十の、ろれより胸を痛め痛めて此日頃の

煌はしや、戀ハが上妹が事、義母上が羞かしき朝夕の、面合はさむも快らぬを、あわれ、あはれ、觀ずれば俘き浮世かな。

痛と老と死の三ツを、遁るゝ事なき人間が身の、愚かならずや、一を一と知り花を花と見て頼み難きを頼みとし、敢て招ける苦勞に泣くは、誠に我の惑ひの罪なり。諸々の欲一度除き去らば殘れる心清澄として衆苦忽ち減ぶべし。さらば一切の執着を解脱して高き思念の中にひそむらむ永世に盡きざる快樂を取て現し世の刹那の快樂を棄つべきなり。再び家にば歸らじ、聲體口色の迷ひの淵に沈湎せる人々が口より洩る不淨の聲、我ば聞くに忍びぬなり。

早や曉の東雲の空稍々白うならぬ、無明の長夜に結べる夢を、戸閉した

る街の家々。雨歇みて霧深く立ち單めたれば其が行方もわかず、虚空に昇りて雲を踏み往くらむ心地や、家を忍び出でたる道之助は、胸の悲みも、身のある處も覺えず、いつの程にか隅田の堤に出でたり。蒼褪めたれど宵にかゝりし顔の暈、拭へるがごと、嚴かなる色輝き渡れり。トある櫻樹の下に佇みて、再び家には歸らじと、又叫びぬ

幽澗清涼境、　楊柳
斜陽壹逕通、
竹深金磬響、
寺有白雲中、

夕朝移藻廻漕酒明霽雲夜手芝羅葉さ三乳夕
れ立啜のの りぎ·甘滅き焦三花に櫻し番母顔
よろやや濡花道戻んの盡ろ页火臥月のさす諫船や
芦桟津れにーすて灯すへ鮎月す透樓に子に兒
の敷島津蛤蜆島島一仏津ふろ津月ろ島にた滝子化
御奥壘祭島も見祭帶陀島津島さ桟の兒ろり水糅
やむのの津せに朝松島祭祭す數祭が作れす椽花
瑠璃頬小祭島入水ぢも祭の祭り祭かり肩り馴束
小冠袖か祭朝のらぼ祭油ゃゃ祭りり作水の一
路り袴な哉祭音すろ哉櫓なな哉な哉車花笄先

佳

津島祭襍唫

遲鶯

山地白雨

岩藤や鶯遲き瀧の路
掛香や帶にはさみし煙草入
短夜や村雲なびく七ッ星
夕風や田植くもりの時鳥
放つ時鎧にちから馬弓哉
雪も賣る藤の茶店の靑簾
お釋迦樣は甘茶がすきて花御堂
友禪を干す鄙の家かきつはた

清境

新田「靜灣

水が山からたら〳〵と流れて、瀧とまではゆかぬか、先づ渴を醫すに足るたけの量は十分、此流を掌に掬ひ上げて、喉を濕す時の心地好さ、實に何とも云ふに云はれず、

故郷に居た時は、何も不足なく暮す身の、是位のものに、まもか是程までの美味があらうとは、夢にも思はなかつたが、足らぬが常の戰場の習ひとて、はじめて此樣な流にて甘露の味を覺にた

空腹に不味もの無しで、飢ゑた時には南京米でも旨ゐ物、それよりは渴した時、殊に戰後の水は、ずつと〳〵美味い

水を多量に、特に生水を其儘飲むのは、萬々惡ゐとゐふ事は能く知つて居る、が何うも、此熱帶近くに來て追ひつ逐はれつ、晝夜寸隙なく駈摺廻る身には、迚も呑まずには居られぬ、

我は此流を十分に飲むで〳〵呑み盡して、ほつと渴を醫した、今迄は此好飲料の爲めに、渴の奴隷となつて居た我、今圖らずも此邊の山水に眼を注ゐた、

嗚呼好ゐ景だ、好ゐ景だ、實に珍しい好い景色なの、だ　峯巒重疊、遙かに淡靄に裹れ、斷涯絕壁の下、奔流激湍、其裾を抱いては離れ、離れては亦抱き、岸に碎け、淵に合し、滔々として涯際なく、或ば深碧翠瀾を彩り、或は飛沫飜翻白珠を躍らして、嶺を動かし、嶽を搖かしめつ、、

其景眞に筆舌の能く盡す所にあらず、

我より他に居る人ば無し、四邊は幽寂靜瀧、鳥が妙なる音樂を奏する、

其合の手には調を紊さぬ流の曲、此他にはたゞ天然の謠ふ聲を聽くのみ

、噫、悲慘極る修羅の巷にも、斯樣な清境の神を慰むべき所があらうとは、

神澄み、氣冴にて、何一点心に係る事無き我は、ほと〳〵人界を超脫して、大事な任務の此身にある事も、全く忘却してしまつた。

時に、轟然、爆然、一發の砲聲は我が耳を貫いた、素破、今迄身をも務をも忘れて居た我は、卒忽軍人に返りて、其音した方を振向くと、這は我隊の、敵軍目蒐けて放つた榴散彈の響である

此響につれて起つたのは、我が今立つて居る所の、谿の上に峙つ山腹より、敵がこれに應砲した、有体に白狀すれば、我はこれに稍や愕いた、

が彼の敵は、此處に我の在ることを未だ覺らぬやう

爰に於て乎、我は此山を攀登つて、不意に敵陣の背後を衝いた、敵は驚くまゐことか、我れ一人を數千万の寄手と思つて、周章狼狽、總軍頓に亂れ立つた、我はこゞぞと突入る、味方もろれと知つて、急かに突貫、

是に依つて我は思はぬ功名を擧げた、と同時に、身ばいつしか彼の白雲棚曳く邊、數千尺の高所に昇つて、脚下に此の絶景を見下した時の意氣

は

緑　陰

西澤菱雅

緑陰の澤長閑なる杜若
黄昏れや百合の香高し一ッ星
嵐山は櫻若葉し新茶哉
明け易き旅寢の夢や風をひき
山青葉閑なる寺の花御堂

女さいくりすと

青波

自分は將來大工業家として、國富增進の一助ともなるべき事業を企てたいといふ大抱負で、商業學校に入學以來も、他の儕輩の餘暇には遊技に耽るをも見返らず、孜々として勤めたが其効果を見ない内に、早くも不幸なる運命に遭遇したのである、これは餘りに學業に勉强した爲め太く腦を害し、醫師の診斷では暫らく休學して靜養しなければ、到底全治することは出來ぬといふ宣告を受けたからで、自分は生命あつての物種といふ古諺を思ひ起し、不健康の身体では到底大事業を遂行することも出來ないと感じて、殘り惜しくも學校並びに學友に別れを告げて、斷然退

學して仕舞つたのである

然し靜養すると云つても、家内に引籠つて書を讀むとか繪を畫くとか、氣を詰める事をしては宜くないとの醫戒もあるから、暫らく海岸地方に旅行して居たけれども、ろれも終ひには厭いて家に歸つてブラリとして居た此間自分ば日常爲すべき仕事とゐふものがないから、自分が健康回復したならば、斯ふいふ事業を企て、見やう、それに就ては内助の妻を求めねばならぬが、如何なる婦人を迎へたら良からうか、世の中には藝娼妓を落籍するものもあるけれど、自分ば性來斯る社會の者を賤しみ憎んで居るから、縱令如何なる美婦人でも宿の妻にとは夢にも思はない、然らば女學校出の婦人は如何であらうか、敎育も大切ではあるが學校出

の婦人も一寸考へものだ、願くは多少の敎育あり寧ろ貞淑温良で、自分の大事業に向つて充分内助の効を與へて呉れる婦人ならば差支へない、其容貌の美醜は措つて問はぬ、など〳〵徒らに空想にばかり耽つて居たから、身体は益々不良で時には我か命最早幾何もあらじと、嘆聲を發することも度々であつた

ろこで醫師は自分の病狀を視て、此上精神を過勞しては可けない、成るべく考へに沈まぬやうにと注告し、運動の方法として早朝の散歩を促かし、尙ほ大弓を射るべく勸めた、然し是れは暫らくの間で直きに倦いて仕舞つた、ろれから柔術も行つて見た、けれども是れも中絶した、つまり所謂根氣といふものが欠けて居るからで、何を遣つても駄目だと思つ

醫師は再考した上、今度は自轉車に乘つては何うだと勸めた、成程自轉車は妙であらう、近來は誰れも彼れも乘るやうになつて、時間の節約と勞力の減少とは確かに他の車馬に優つて居り、尙且つ衛生上にも惡しからずと聞いて居る、即ち腦病、胃病、初期の肺病及び神經諸病には効があると云ふ事であるから、自分は一寸乘つて見たくもなり、他人の世話でデートンのロードスクー一臺を求め、自轉車の稽古をすることとなつた。

さて自轉車に乘る事となつてからは、毎時の樣に朝寐もして居ない、朝早く道路に出て人通りの少いを幸ひ、稽古をするとて自轉車に釣られて、横に倒れ前に蹶き汗水流れて奔走するのである、處が中々乘れない、

三日目の夕方廣見へ車を曳いて行き、例の如く餘念もあらず稽古して居ると、一臺の自轉車が我が脇をスーッと通つて行つたと思ふとかほりよき香水の香ひかプーンとして自分の鼻を撲つた、オヤと思つて見れば妙齡の一婦人がサッ爽と乘つて行くのである、婦人ですら彼れ程に乘るものを男子たる自分が何條乘り得ぬ筈はない、今に乘つて見せるぞと勇氣を鼓舞して頻りに稽古する、焦れば焦るほど車が自由にならず、着て居る洋服は汗でジト〳〵になり、額から鼻の先は汗の玉の落ちる程、過度の働勞をした爲めか腦に充血して來たかと思ふと、フラ〳〵として來て自轉車を地に擲ち、自分は後ろに倒れて知覺を失なつた。

自分は其後如何したか少しも覺えがない、フト氣が付いて眼を開いて見

ると、自分は人に抱かれて居るのであつた、驚いて起たうらると、アレまだ大變な熱でございますよ、といふは婦人の聲である、益々驚いて見ると、年頃十八九の、うれは、すつきりとした美人で、髪は夜會結びに白リボンの簪一本を挿いたのみ、顔には別に白粉を施しても無いに、襟首の白さ骨も透けるやうで、濡れた烏のやうに黒い髪毛と相映發して、豊頰朱唇、玉指細腰、穫易からざる美人である、身には伊勢崎絣の單衣を着、海老茶色の袴を穿いて居る、如何しても良家の女學生としか思へない、地上に片膝を着いて自分を抱き起し、手巾に氷を包んで自分の頭を冷やして居るのであつた。

自分は其親切を悦ぶよりも、自分が道路に醜体をば現はし斯る美人の手

に介抱せられたのを耻かしく思つて、美人と顔を見合はしたとき、彼女が突然笑つたにも拘らず、自分は熱する顔を一層赤くしたのである、稍暫らくするを氣分も大いに收まつたやうだから、自分は起つて禮を陳べるにどうしたものか、面と向つて言ふ勇合が出ない、伏目勝ちに切れ〳〵に然も半は口の裡で言ふた、自分は既に二十才になるか實は眞の坊ちやんで、人に向つてト殊に婦人に向つては耻かしさが先に立つて碌に口も利けないので、尤も一ッは病身故でもあらうが、兎に角自分乍ら齒搔ゆく思ふのである、すると美人は散歩旁々自轉車で此處へ來て兩三回乘廻して居る内に、自分が卒倒したのを見て驚き驅けず寄て介抱したが非常の熱があるから氷屋まで驅付け、氷を買ひ來つて腦部を冷やした次

第を、濕つた手巾を絞りつゝ言葉さやかに語つて、豫後の注意を促がし何れ又お目に……と自轉車に乘つてスーッと行つて仕舞つた、自分は覺にず恍惚として其後ろ姿の見にずなるまで見送つて居た。

斯くて自分は闇くなるのに氣が付いて家に歸つたが、何うしても美人の面影を忘るゝことが出來ぬ起つても居ても婉然たる海老茶袴のサイクリストが、眼の前に顯はれてならぬ、翌日の夕方又誓古に行くと、昨日と同じ時刻に美人が來た今日は自分から驅け寄つて昨日の禮を陳べると、美人は手で打消して自分に口を開かせず、却つて自轉車の誓古を手傳はんとて、其乘車を棄てゝ自分の車を支へ、自分を扶け乘せて徐々進行せしめ、六七回も往復する內に、自分は自然に重心取れるやうになり、

獨りで車を進行せしむる事が出來るやうになつた、其時の喜びは如何ばかりであつたらう、否、自分よりも美人の悅びは他人事ではないやうに思はれたのである。

自分は其翌日も翌々日も、自轉車に乘つて廣見に行き誓古を積んだが、何うしたことか、再び彼の美人に遭はぬやうになつた、病氣であらうか何うしたのであらう、住所も氏名も聞かぬのであるから尋ねる譯にも行かぬ、縱令聞込て居るとも無慮に尋ねられるものではない、どうしたのであらうと自分は其事ばかり考へ込み、相變らず空想に耽つたか、幸ひにも自轉車を始めて數ヶ月の後には、宿痾たる腦病も漸々快方に赴き食慾も進み肉色も良くなり、見違へる程健康になつた故、斯うなると自轉

車を道具に遊ぶことを覺ヒ、遂には輪友倶樂部に加盟することになつた。

此倶樂部は實は道樂息子の會合であるとは、世事に迂い自分の知てる筈はない、只輪友を有するの愉快を覺ヒ、遠乘、競爭などに出て見たいといふ單純なる量見であつたが、朱に交はれば赤くなるとの比譬の通り、道樂息子の中に交はれば坊ちやん育ちなる自分も、多少は道樂の空氣を吸ふ樣になつた、煙草も喫めば酒も飲む、流行唄の一ツ二ツも覺ヒたが、未だ藝妓に知己はなかつたのである、然し彼の美人は遂に忘れる事が出來ないので、自分一個のサクイリストに成り濟ましたに就ては尙更自轉車の趣味を解する彼の美人の如きものを妻に迎へ、花晨月夕共に輪を

聯ねて散策したならば、其愉快は何んなであらう、といふ感じは益々切なるものであつた、處が或る年の初め輪友倶樂部の新年宴會が開かれたから自分も出席して見ると、酒池肉林の大盛會、花の如き藝妓は席上を越旋して、絃歌洋々歡樂盡くる期なしと思はれたが、其内に誰れかが、小雪は何うした、自轉車乘の宴會に女サイクリストたる小雪を聘ばない事があるものか、幹事君チト不注意ではないかと云ふとヒヤ〳〵といふ聲が多く起つた、すると幹事の某君、御尤の御説だが幹事に拔かりはない、今に出現しやすから暫らくの御辛抱を、と言ひも終らぬ中一人の、美人、れ定まりの三枚重ね、髮は潰し島田とかの意氣作りで、大きに遲なはりまして、先づお芽出たうと敷越しに辞儀した藝妓がある、ヤア小雪

が遲かつた〳〵判官とのには既に切腹めされたぞと濁聲に叫んだ者があるので、小雪は莞爾笑ふて座中を見渡し、ツイと自分の前に座つて、貴郎、お久し振りでございましたね、モウ自轉車も餘程お達者におなりでせうと云た、其聲音、其面ざし、廣見に於げる女學生其まゝ、我が夢裡にも去らぬ女サイクリストではないか、自分は思はず駭然として手にある酒杯を膝に落したのである、身分の空想は悉とく間違つて居た、彼の美人は女學生でも何でもなく、自分か嘗て蛇蝎視した藝妓であつた。が然し當時の自分は之れと失望したかつたのみならず、寧ろ多少の滿足を以て迎へたのである、自分の品性は是に於て確かに墮落した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

是れは或る青年なる自轉車乘の懺悔談であるが、彼は此處まで語つて何も語らぬ、然も其眉宇には愁然たる色が籠つて見える、聞けは彼は一度小雪の容姿に迷ふて、彼の遠大なる抱負も高尚なる理想も悉く抛つて仕舞ひ散々〳〵遊蕩を盡した揚句、サイクリストの自分が、將來を契るべきの妻はサイクリストに限るとの口實を付けて、終に小雪を落籍して或る處に圍つたが彼が小雪に向つて期した處の理想は、少も實行せられずと却つて友人に見捨てられ、甚しきは夫の倶樂部の道樂息子連にまで指彈せらるゝに至つたさうである。

彼は自轉車に因つて宿痾を癒したが、又自轉車に因つて墮落した、自轉車は彼の爲めに幸福を與へたか將た不幸を與へたか、之を知るものは誰

ぞ、若し自轉車の神なるものあらば、それ

五月雨

烏不關

五月雨のはれて風呂たく煙かな
五月雨の巣にカナリヤの病かな
五月雨のはれて水賣來りけり
五月雨や簑を流す水驛
荷駄馬の結びたる尾にさみだるゝ

八草嵐

大島寶水

等閑に浴衣脱ぎたり青疊
夕虹の消になんとして青田哉
莽や夕浪寄する水馴棹
氷賣る山の茶店や椎の風
夕立や江南を繞る女松原
撫子や京に住ひて歌言葉
薫風や華嚴の瀧に雲かゝり
鶯飛ぶ夕闇草の嵐哉

妾薄命

天琴子

（貴郎、事實ですか、ェ、嘘言でしやう、眞實、ま好いことばかり仰有いますワ、嘘言でしやう、屹度、屹度嘘言です、妾、丁と知つてますワ、オホ、、子、貴郎、事實ですッて、嬉い、稍と安心しましたヨ、妾も子、昨日、斯うと一昨日でした、さう〳〵たしも一昨日の夕方でした、れ母が來ました子、れまにも能い年齢をして、いつまでも如此商業して居ては、世間の人が善くは言はぬから、丈度知己に、ェ、何んとか言ツてましたヨ、呉服屋さんとか、洋物屋さんとかの旦那が、子、貴郎、お嫁に娶ひたいッてヨ、誰れッて、妾ですワ子、ェ、往けと子、れ氣の

毒さま、嫌やのことサ子、何と言つたと、妾ですか、妾も妾だけの考案があるから、心配おしではないッて、母に言ひましたヨ、母ですか、ろう言ふことなら何よりか安心だ、妾（母）も寄る年齢の故か、種々と心になるのでとか何とか、愚痴を並べて歸りましたワ、貴郎、何お笑ひ遊ばすの、冗談ぢやありませんヨ、それに貴郎、眞實ですか、眞實にれ國元にはれ母さまの外、あの、貴郎、眞實にれ奥様は有りやしません子、ェ、虚言でしやう、それでも子、何日だッたか、春山さんが登樓ッして子、秋月には非常な美くしいれ奥様や、ろれは〳〵可愛らしいれ兒さまがれありなさるッテ、子、貴郎、嘘言ばッかり仰有つて、あの、わ、妾を能いやうに、ェ、春山さんが水注すのだと、いこに、妾しや、白痴です

から子、澤山、く、口惜しい、わ、妾しや、遮莫、馬鹿だから……）

恨めしさうに男の顔を視き込みながら、キリ〳〵と齒を鳴らして襦袢の袖口をビリ〳〵と嚙み破つた。

あまり美人といふでもないが、何處となく溢るゝ愛嬌、ありあまる黑髪にはちとチヾレの癖はあれども、これ迎も氣になる程の難でなく、峨眉星眸、一口に言はゞ、まづ普通勝れの方である。

茲處掛川幾百の藝妓中に姐さんと呼れ、杵屋の房子といへば、藝腕も氣性も負けぬ氣の、よし車夫風情の嗅と言れて、糠漬の菜に生命を繋ぐとも、貴族紳士のお妾さまと呼はれて別莊のお守は眞平御免と、今日が日まで立てた浮名は巷の塵ほどもなく、男嫌いか、石女かとうたはれし

身の、緣は異なもの獨活がさしみの妻とやら、某會社の書記どの秋月照也とて、色黑き三十男、無愛想と無遠慮、無頓着な武骨者とつゐした事より淺からぬ交情となつたので、今宵も房子より序の使に吸月樓の奥座敷にゐ安くない御愉快筋、されど如何せしものか秋月は、悄然として手を約し一本のビールまで輕からぬ樣子である。

（何、馬、馬鹿な事、僕が虛言なんか、房子、秋月も男だ、一旦かうと盟つたからにやア、弓矢八幡、何虛言を斷じて汝の前途を過まらしはせないヨ、安心しな、僕はよし死……）

（エ、……）

（いや房子、人世は一葉の舟に揖して洋々たる荒海を渡航ると同然だ

、浮沈は平常のこと、或る時は暗礁に乗り上げもしやう、が、房子、虎穴に入らずは虎兒を得ぬ例令、順境に至るには必ず逆境に陷るもの七轉八起して始めて彼岸に達するのだ、いや之れは元來冗談ぢや、結局浮世の噺ぢや、ろんな事萬に一ある筈はないのだ、が、房子、兎角世間の人といふものは利を見て集り、害あるを知つて遠ざかるもの見捨はせまい子、房子、汝は……）

（貴郎、今更そんな御言葉を、房も賤しい家業はして居ても、人普常の魂はありますヨ、ろの御心配は……貴郎ころれ見捨てくださいますな……）

ろの二

（ヲイ秋月、大層鬱ぎ込んで居るぢやないか、はゝアまた始まつたな、例のが、ハ、、、、、君如何だい遠足運動とまではゆかずとも一つ日坂から無間山にでも出かけて、この秋色を探らうぢやないか、君の詩嚢も此頃は頓と拜聽ねんから、一つ紐解いて貰ふぢやないか、ヲイ君、有耶無耶の念を散ずるには野外散歩に限るよ、君、往う〳〵）

秋月の同僚に春山霞といふ晒々落々淡白な男がある二人の交情は實に濃やかなもので、骨肉の兄弟かとまで、倶に秘密をうち明けて語るのが常時である、が、元來秋月照也は些少の事も非常に苦に病む性質、春山はまるで正反對で、夥大な事も一向苦にせぬ性質であるので、秋月が焦心苦慮の末やつと相談すると、例の笑ひに呉魔かして茶にして了う、が

、正直で、親切なことは即ら會社の信用を得て居るのである。

（イヤ春山、僕がァ子實に輓回す可ざらる大罪を犯したヨ、今更悔いても後の祭禮だが、君また笑ふ、君は不可、君を信じて相談するのをいつも〳〵茶にしては困るヨ、實は子、僕かァ道德の罪人に成つて了つたのだ、エ、勿論サ、彼の一件よ……）

（ハ、、、、小心宛も婦女子の如しぢや、秋月、君は全体何事にまれあまり熱汪し過るから不可ぢや、だから失敗を招く、といふとちと失禮ぢやがあまり君は正直ぢや、戀は路傍の花、見捨て摘み捨てにしておけば可いぢやが、手折つて床上に挿さうとするとクレ種々の故障が出さるぢやテ、それに君は神經的動作が普通以上だから、婦人ならばヒス

テリーか、まア男としては凝狂症とでもいふのか、ハ、、、、心配し給ふな、飛んでもない病源を造つちや不可から、ちと精神を快活に持ち給へ、何すれぞ堂々五尺の男子が、一女子の爲めに快鬱として自から病を買うちう愚があるものか、道德の罪人、何關うもんか見給へ、今日社會の上流に立つて、貴顯とか紳士とか、名譽ある稱號の下にある人物が宴會の席上で雛妓を弄し、甚だしきは有夫姦をして法律の罪人となり、諸新聞紙上で四面攻撃を受け乍ら怡として耻ぢず、然かも平氣の平左で貴顯の職を犯して居るぢやないか、君、世の通弊は實に驚いたものサ、意とし給ふな、意とし給ふな）

和洋折衷の三層楼上、觀月の宴を催して居るのは、彼の秋月、春山の二人と座に待るは例の房子である、東天の横雲ちぎれ〳〵に冗げて、美くしきこと鏡のやうな虚空に、徐ろ〳〵と登り〳〵たる三五夜の月。

半僧坊山の松に吹く風の調がは自然と逆川の水の皷に和して、哉は急しく高く、或は緩く低く、呂律よく調ふて聞ゑる。

聲も音もなき月の光の中に、うれしみあれば、かなしみあり、千里平等の靈光、如何なればか見る人毎にかわるのであらうか、ママゾンの大河に流るゝと、更科の田毎に映るのも、月は只一つ、美人が恨みの笑に宿るのも、志士が憤の涙に浮ぶのも、月は只一つ、一杯の酒にも、万里の海にさ、月は只一つである、鷄鳴山の秋の夜の月、羽が八千の子弟を

散し、赤壁の明月曹操が腸を斷つ、思ひ來れば實に寄しき怪しきは月の心である。

（春山、如何も好い月ぢやないか、江畔何人初見月、江月何年初照人、人生代々無窮已、江月年々望相似、不知江月照何人、但見長江送流水、白雲一片去悠々、青楓浦上不勝愁、とか何とか實に宇宙の滅びぬ限りは清き姿は滿ちて缺け、かけてまた滿ち、永久に消せぬのだ、この光を浴ひては誰か一縷の感想を惹起さゞるものあらんやだ子、どうだ、君……）

（いかにも同感、足柄山の月に義光の舊事が偲び、月明星稀烏雀南飛の一向は今も亡びぬの、や、へだてたる人の心のくまにより月を

さやかに見ぬが悲しきとやる、君の妹き詩人は、さそ思想が腦裡に滿ちて來るぢやろ、子、秋月君、望郷、しかも最愛の……）

何思つたのか春山は急に首をすくめて、妙な風情して房子を見た、この時、月に心を奪はれて居た房子は不圖秋月を觀しつたので、秋月は憂愁に閉、うれて居た眉の皺と、拱ぬいて居た腕を解いて、わざとらしき笑を含んだ、が何處となく淋し氣に見受けられた。

川向ひの二階から俄かに絃聲が聞ゑだした

二百哩と隔つて居ても。

おなじ雲井の。月を見る子、

見るにつけ、聞くにつけ、思ひのたねの一つ二つと增して、胸間來往

する苦悶に今は堪ゑがたくて、わが良心の身を責るのか、秋月照也、涙か、露か、一雫。

（チイ、秋月、君はまた國の妻子、いや何、例の下らぬこと杯たもひ出したぢやないか……）

妻君の二語、耳敏くも房子は聞き取つたのか、いと座を立つて驀地に椽に駈け出した、「スワ」と後方から春山も、立つたり居たり躊躇して居る、秋月照也

（エッ、し、しまつた……）

（三層樓上から身を逆川に投じた房子、衰れ月は冷やかに天主臺の紀念牌と共に水にうつて居た。（完）

短夜

木村霞十

短夜やものを尋ぬる小闇より
耻しき病をもちて薫れ香
蚯蚓なく小溝の夕や蓼の雨
麥刈の鎌磨く人や朝の月
うき戀や白百合の根のかさね〳〵

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

柳橋漫吟

村瀬美胤

○
花は根に鳥は古巣にかへるその若葉涼しく風渡るなり
○
心なく折りて聖書にはさみけり罪もあらなくに白茨の花
○
くづれたつる瀧のしぶきにしぶかれて谷のうら杉嵐ふくなり
○
うまひきて父かへりけり酒かいて子はかへりけり蚊をたく宿
○
つれ〳〵にすのこにいで、獨りくむ酒のこりなし梅雨の空

○

雨のうちに庭の杉垣たちしのびぬまたかりこまん庭の杉垣

○

十年ぶりに君と相見るこよひ哉前世をかしと酒にうたけん

○

みつ潮に船はいりきぬまつ人は今日かへるてふすこやかにして

○

人にゆきてまた語らわんよしもなし幼遊びのいとしわがつま

○

君がてにふれつと思へばろのまゝにかへされなくもうれしかりけり

○

れほまへにうつかしはての音きゝて神のつかひの鳩ぞ群れ〳〵る

○

かべにうつるわがやせ姿はかなみてまもらひをれば夜ぞふけにける

○

いつわりのなき世のさまにかへれてふよるの御神の恵かしこき

○

歌反古は風にみだれて部屋のうちに主人はあらず夏の夕暮

○

氷うる家こそなけれひやしうるまつまゐこうせん小山田のさと

○

つるくさの花にまかせて片折戸さしかたむたるかくれがの庭

○

かくやまの峰の鋒杉としをへて神さひたてり峰のほこすき

○

うはべには錦のきぬをまとへども心のうちはかくれざりけり

青すだれ

みどり女史

我はいたく惑ひぬ、
友なる人は曰く、君よ、我れと渠れとは昨日今日の仲にあらず、千代の末迄も契りつる者を、今ぞ思ひ出たり、手に取るな矢張り野に置け蓮華草、嗚呼然ならずやと、我れは點頭きぬ、
市子は答へり、悪徳新聞の筆に上れば、直に然なりと斷ずるは早し、褒取る身の憐れには、思わぬ人にも嬌を呈する亦止むを得ぬ事ぞ、君もあらぬ事幾度か彼紙に歌れし覺へあらずや、願くば察し給へと傳へてよ、我れは輕く可諾ひぬ、
友は笑へり、引手數多の流行妓、明聟の中に蔭口叩く者なからすや、粹の巷に名を歌るゝ友にして斯く詮するは野暮なりと、我れは然なりと答へぬ、
青すだれ一重彼方の人心、白き物塗る魔性の素顔、君知るや否や、

實櫻

増永徂春

實となりし櫻の雨や郭公
夢浅もどく鸚鵡の籠よ夏せばし
短夜をきらめきの星楓かな
薫風や牡丹を活けて支那料理
抱籠や百合の白き浅枕上
雷晴れて庭木夕や雲の峯
掛香や京に似ぬ髪笑らわれな

月小庵小集霞十氏に寄す

松島に居れば涼しく竹美人

夕靄

曲水山人

午後六時何分かに多治見を發した中央列車は、今勝川の鐵橋を越した計り。

日はとつぷりと暮れて、自然の彩色れもしろき五色の夕靄か天神山のあたりを立て籠めて、世界は今將に安息の境に入らんとして居る。れ絹は病みほうけし身躰をやつと椽先きの障子に擡せかけ、五筋六筋の鬢のもつれ毛を風の戯れに任せで掻き上げんともせず、今更のように溜息をついて、

『叅さんも……

と、力なき聲で云つた、その顏には、一種云ふ可からざる恨みの色が現れて、ろよと吹く風に南天の葉がガザ〳〵と音のしたので、見るともなくふり仰いだろの眼には、あやしや一滴の露を宿して居た。

丁度ろの時裏の籔のあいだから出て來たのは母親で、最う一兩日には蠶が上ると云ふので二三日前から、夜も晝も一生懸命丹靑を盡して居る。

○母親はお絹を見て、

又かね、お前も餘ッ程困り兒んだね、れ前さう思つたつて爲方がないじやないかようッ、寢て居で身躰によくないから、さう眺め込んだつて見ゑるもんかね、どうせお前薄情な男だものれ前の事なぞ瓜の垢程も思つて居やしないんだよ……

れ絹はまたゝきもせず何分か見詰めて居て、何事も云はなかつた。母、親は桑の葉を盛つた籠をろつと下ろして、椽端たに腰を掛けた。

『ろれはさうとれ前加減は奈何だね、チト好ひかね……ろれとも

と、氣遣しろうに我が娘の顔を覗き込んだ、之も親の慈愛である

れ絹は始終れとがいを襟に埋め弱々しい眼をしばだいて、苦るし氣に息をのみ急きくして居る。彼一語、是無言、果は不言、不語、只黙り、天地は一寸寂寞として、親子は少時ほんやりとして、些のもの、音だに聞ゑぬ。

急に四邊が明るくなつたので、母親は思はず首を擧けた

『れ、れ月様が

と咳いてほつと呼吸をした、十七日の月は今しも龍泉寺山を離れたところで、銀色の光は水の滴る如く下界を沽して、野一面幾万の玉露、純美至妙、塵の身も心も洗はれて天上するかのように思はれる。突然に撞き出す鐘は大平寺であらう、前の方の村端で子持が唄ふ聲が幽かに〳〵。

『れッ母さん……私を……ね……

と、れ絹は始めて口を切つて、苦しさうに言ひ淀んだ。

『あの妾を……東京に遣て下さいませんか、と、辛くも思ひ切つて言つた、で身を戸箱に靠せた。

『エ、何だい、東京……マアろんな身躰で……

母親は意外の言葉よ屹驚した。

『デモ故郷に居ても仕方がないの、いつそ東京の叔父様處へ行つて養生したら、あの事も忘れて……

『だがねれ前、東京は土地がよくないし、いくら叔父さん處だつてさう思ふように養生が出來るものかね、ろれは最うお前の胸の中もよく察して察し拔いて居るよ、でもねお前、少しは私の心も察してれ呉でなくちやァね、何しろ一人の大切のお前のことだから考へ通りにも仕て上げたいさ、上げたいは山々だけれど……それ此方が零落になつてから見向きもしない薄情漢、エヽ思ひ出すと……世の中は兎角かうしたものさね……

れ絹は何とも云はず俯向いた。涙であらう夜目にもしろき白露の、青覺たる頬を傳うて乱れ落つるのが見ゑた。やがて顔を擡げフト表の方を向いた時。―　杉垣の向ふに腕を約して木像の如くに、行んで居た一人の少年が在つた

萍花

神林時處

短夜の月殘りけり柳の戸
古き幣の流れもあへず杜若
紫のにほひ袋や京の人
螢飛ぶ水一筋や草の闇
朧なく宵の萍花白く

露の瓜

友清友靜

炎天や打水乾き蟬の聲
青葉茂る其下闇や心太
裏垣や畑道うねり瓜の花
朝を其茄子美しき市の雨
掛香や戀未だ知らぬ二五の君
三保を吹く松の嵐や雲の峯
畑明けて露負う瓜の美しく

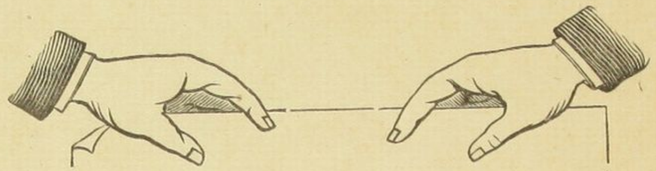
長良川

月涼し夜半を長良の鵜飼舟
氷賣る稻葉の茶屋や瀧の音
吹こぼす椎の嵐や金華山

弊社製造の《画はがき》毎年々末には一方ならぬ《画はがき》の御用
津山御出開示被難有御禮申上候▲本年も袋入上等もの五拾枚にて特別
金參拾錢にて賣出し申候間舊倍御引立願度候郵券代用一割增

他に粗造の繪はがきあり注意せられよ流行に連れて賣出すもの
雨後の筍の如し是等は《規則》の量目、寸分、なんぞは　めちや〳〵
直安に賣らん爲使用者の迷惑をかまわない發行者があります
弊社發行之繪はがきは發行毎に名古屋郵便電信局へ伺ひ濟之品であり
ますから御安心之上御買上願度候

私製はがき賣出し廣告



金城社の特色は紙質は舶來の上質政府の葉書にもまけぬ位い元仕入の驚くべき高價なる他店の中々遺ひ切ぬもの他は和製を遺つて居るから堪かが違ふ是等は素人でも一目に兩方ならべて見れば成程とわかるが一寸わからぬは繪はがきの意匠である新年の年賀狀と云へば鶴と日の出の繪はがきを發行して滿足して居るのでなひ金城社は商賣利益を見るよりは全体道樂が勝て居るから製造する際には算盤を持た事がない印刷の美術と品に斗り目を付て居るから氣の有る人は茲等を少しは注意して見てやらぬと可愛想だ

名古屋市廣小路通榮町二丁目

金城社

松風白波

花舟郎

海の稔密

淋しゃ磯のはて遠み
千尋の底に秘めませし
辛き藻汐の運命にて
いたましいかな汝が戀の
かすかに波の忍ひ音は
戀の惱みを夫となく
怨みつきせぬとことばの
悲しき風に鳴る夕
闇に響く音を聽けば
うれよみ空に新らしき
羞らう如きあか星の
光優しきひかる君

橋なき路を通ふとち
みよ大海のすさまじき
闇につゝまりなみの綾
落つれば墓と知るやらん

心をひめて文すらく
せめてはくめよ誠なる
二人が戀の血汐はも
云の胸の映るかな

傳ふか彩ある星屑の
飛ぶとうれ矢のうれならで
汚れわたれる人の世を
咒ふかあはれ紅に

暗きにおちて消るゆかば
さびしき海よ八重のきり
涙はものうゝ呻くのみ

あゝ行末のはかなやな

水泡

松吹く風の靜けさは
匂ひたかき葉に鳴りて
千歳神古る岩舟や
夜の便の白羽鳥

涙に映ろふ森かげの
蒼き巖の苔の海
みなわ逆捲くさゝやきば
いにしを語る言葉かも、

松の磯崎うす雲に
沖にて遠き眼路の上
狹霧にまよふ帆の影は
うすらに天に釣られつゝ

しぶきは雪と空に舞ひ
荒磯の波のくだけてや
みたれみたるゝ心はも
かよわき胸のなまじいに
うらゝに照らす朝日子の
虹の小橋を彩どりて
消ゆるにはやき幻の
はかなき影をみるなはす
うはうらぶれの少女子が
ゐならぬ戀の懊惱に
僅かに洩らす忍び音は
熱き涙のしたゝるゝ
ああ淺ましきみ心と
恨むもおろか僞りの
つれなき戀に糾されし

きつなを今はいかにせめ
世にあたゝかき春雨の
野にしげ〳〵く濺がれて
菫は咲きぬむらさきに
暫しはいろも歡樂の
蝶の羽袖を飜へ〳〵
厚き情の醒めやすき
あせし包香の今更に
返さんすべもあらなくば、
ゆかりば戀のこ紫
露にほころふ花萌の
色に香にいてほゝ笑むも
あまりにもろきやさ姿
海の秘密を誰か知る

夕にめくるうすもやは
やがて包まん闇衣の
裾をほかしの涙摸様

されはつれなき我戀の
うた語らはん海ならば
寄せては返へす恨にも
消えてゆくらんうたかたの。

同一の日に原稿を渡して同一の日に發刊さるべき筈で
そして延刊乍らも青すだれがさきに出たクレナイ殊に
如洲小史の好意を謝して置く同子發起の圖書館には天
下幾千の誌友奮て援けられん事を切に望むのである

はたゝ神

山高牛郎

短夜を明けて蓬の小池哉
虹遠く雨はれわたり百合の花
五月雨の篝火もえて鵜川哉
斧をふる蟷螂の子や青芝
風鈴に明げ易き夜の簾哉
雨晴れの夏山や裾の麻畑
山蟻や寺拔け道の夏蕨
梅雨はるゝ夕虹山やはたゝ神

祭日

三宅梅園

《上》

『れ母ちやん……何して居なさるの、今舶來屋のれ照ちやんも、姉さんと伴はつてれ參りたのよ……早く坊も參りたいわ……』

ふさ〳〵と緑の黑髪を束ねて後へ垂れ、鈴の樣な眼元の愛らしい房子と云ふ、今歳八つになつた小女子である、慌てゝ外から歸つて來て氣比神宮へ參るべく母親にねだるのである。

『何だね房ちやん……騷しい温和しくれしよ……今にれ父さんはれ歸りだと直く連れてれ詣りするから暫く待つてれ出でよ、駄々をれ

云ひだて連れて行かないよ……。』

大坂朝日新聞を擴げて小說を讀んでいた、三十格好の丸髷姿、痩軀な何處となく愛嬌のある、くッきりと色白の小柄な婦人で、東京縮の黑地中柄の裕衣が少し派出だが能く似合つてゐる、近頃此地へ轉住した或る役所官吏の細君なので……。房子を視詰めて儼とした聲で慰めた。

房子は拍子拔した樣に俯向勝になつて暫く沈吟つて居たが軈て顏を擡げて薄薔薇色の頰をふッつりと脹らして、

『れ母ちやんは何時も欺すんだものいやわ……れ父さんだつて何時れ歸るの知れんのだし……遲くなると氣比さんも寂しくなるわ……

……未どんは留守しますよ、早く伴れて行つて頂戴よ……ねれ母ちや

ん……。』

執拗ような語調で少しく怒氣を含んで恐る〳〵親母の側に躙り寄つた。

『ホホ……不可なのよ……末がつて賑な處へ行きたいのは同じ事だよ。お父さんはね東の温泉湯へ行かれたんですから那麼に永くはかゝりませんよ……でね今にお歸りだろうからお待ちよ、今日は嘘は言はないから……だが其麼に聞疏がないと伴れて行かないよ、整然温和しくしてお居でなさい』

儼然として窘めるのだが其聲の何となく優美しい調子で、莞爾と微笑んで亦新聞を手に讀み初めた。房子は言出すべき端緒を失つて悄然として居る折しも町役場の時報鐘がゴーンと暮を告げて餘音長く尾をひいて聞

ある……。

（下）

『奥様マア暗くつて歩けませんね……お嬢さんも危うご座いますよ……。』

細君と嬢君と下女とが三人伴で氣比神宮へ詣るべく橘町から御手洗町へ出る或る細小路を出る時にどんよりとした下婢の聲。半町程前に『かしわ御料理』と筆太に朱書した掛安燈が薄く餘光を散つてゐるのみである。

『眞箇に暗いのね……だが大通りへ出ると這麼なことはないよ、瓦斯燈が澤山あるからね……。』

と細君のしんみりした聲、後からカラコロと木履の音がして妙である。

『奥さん、福井なんざ瓦斯燈と電氣燈とでまるきり畫の樣ですが、此地は福井から比較と田舍でさね……ハハ……』

敦賀へ轉居の前は福井に居たと見えて下婢は評を入れて頓狂な聲で亦厭らしい笑ひ聲をする。

大道路へ出ると行く人、歸る人、雜踏して木履の音、雪駄の音、別世界になつた心地がする、富貴町の色瓦斯燈の賣藥店の角からくるりと左へ曲つて二三丁歩いて亦左へ折れると神樂町なので、道の兩側は露がちらほらと見えて何か頻りに辨舌を揮つて居て人がまるで蟻の餌に付た樣に所々集つ　ゐる、三四丁行くと直く社前、曾て福井新聞に日本一だと云つた大きな赤鳥居がある、今年大修繕を加へたので、宏大美麗で露店の

灯で赤光りに輝いてゐる。

『奥さん立派な鳥居ですな……之が日本一ですつてね、妾なんざ此地へ來て見初めですの……。』

仰向いて眼を睡つて呆れたと云ふ格好で凝乎視詰めてゐる。

『ホホ……可笑しいわ、前程此地を田舍だなんて言ふお方がさ……鳥居を見て喫驚するなんて滑稽だよホホホ……。』

笑談半分に細君が言ふと躍起となつて分疏して、

『奥さん厭ですよ、妾喫驚したんじやありません、立派ですから立派と言つたばかりでさ……。』

『ホホ……尙更可笑しい、よサア早くれ詣りしませう、マア澤山の

人混雑だね。』

交通頻繁で、下駄の音、雪駄の音、露店の賣聲、小兒のれもちや笛、喧々囂々と云ふ樣な混雑である一行は參詣を濟んで境内の散歩を試みた、右も左も夜店の並んだ細い路を左に折れた角に、針箱、簪、櫛、鏡、人形等一切女の需要品を出した小間物店を房子は早くも見出して、

『お母ちやんアノ人形一箇買つて頂戴よ……ねお母ちやん……。』

行過きやうとした母親の袖を確かり握つて房子はねだつた。前方ばかり見て氣がつかなかつたが不圖見ると成程裸人形の美しいのか微笑んで並んで居る、

『房ちやん亦かい、一ヶ月程前に買つて上げた人形も直ぐ毀損て了つ

て今度買つてはお父さんかお叱りなさるよ……眞箇に困るね……だけどお菓子も何もゐらなけや内々今度だけ買つて上げるけど……。』

子に甘ゐのは世間一般親子の情、這う云ふては居るものゝ買つて與りたゐ心は讀まれるが一寸窘めて見たのでもあらう

『お菓子も何もゐらなくつてよ、アノ大きなの買つて頂戴よ……お母アちやん……。』

母親は遂に子の愛情に袢されて雛人形を買つて與へた、此の時房子が滿足の笑凹千金を投じても買ひ得べきでない。軈て社殿の横を歩るいて少し廣い場所へ出ると玉突、吹矢、射的、など頻りにやつて居る人か黑くなつてゐる、此方では人形芝居、猿芝居、猫と鼠の狂言など大きな看板

を掲げて各々の木戸番の男ゞ聲を嘎して觀客を迎へてゐる『サア被在い猫と鼠とが敵同士であるが猫にも愛情があつて鼠を抱いて寢るのです、エー其他いろ〳〵の藝を遣らせます、サア今は恰度可い處、サア被在いサア木戸錢は僅か大人二錢小人壹錢でムいます、サヤ被在い……。)

細君と下婢とが頻りに看板に見惚れてをると、房子は入つて見たくつて堪へられぬ樣子である。

「わ母ちやん……烏渡見せてくださいな……一錢でよゐのですわ……。」

母親は顏を顰め語を遮つて、

『眞箇に仕方がないのね……今人形を買つて上げる時、何にもいらないとわ言いたでせう、最早何も知らないよ……サア早く歸りませう……。』

報拋つて動かないのを無理に慰めて、歸路へ出た。

太鼓の音、鐘の音、人の笑ひ評する聲、など耳に鳴り響いて喧しく五月蠅程である、只涼しさうに聞へるのは氷賣の呼聲のみで……。

不圖空を眺めると無數の星が金の砂子を撒いた樣にチカ〳〵と輝いて綿を搔つて散らした樣な白雲がぽか〳〵彼方此方に徘徊して居る、折しも暗黑の夜に小さな赤い光りを放つた終列車ピユーと滊笛を鳴すかと思ふと間もなく虛空に響動いて敦賀の停車場……プラツドホームへ着いた……。(完)

鬼百合

增永煙霞郎

短夜の蘆間流るゝ螢かな
掛香や夕顔の卷宇治の卷
螢追ふ京のうなひや絹團扇
君が詩の奇しきに蓼を題すべく
麥刈るや山畑は黄に夏霞
鬼百合や舌はきて戀を笑ふらく
桑の實の草にこほれて草いちご
戸隱の木の下闇やほとゝぎす

哀歌

紫衣冠者

田は荒れつ畑は癈れつ見るかけもなきあわれさの民三十万
食ふにろれもものなき哀れはらからが叫びの聲のなど聞えざる
軒やふれ庇かたふき此夜比身にしむ風のさむきになくよ
あゝさても我同胞の幸ぞうすき飢になきつゝ終へんとすらむ
幸なき子ひねもす飢に悲めど榮ある子等の醉まださめぬ
ろの上に謳ふ人はあまたあれどこの同胞をすくふ人なき

（以上六首鑛毒被害民を思ひて）

朝　靄

石井不轉

朝靄や籬かくれの杜若
短夜の綱ひく聲や靄の中
萍の浮ぶが如き螢かな
草の戸や蓼あか〳〵と曉小雨
炎天や瓜の花さく山畠

捨小舟

山田松琴

土手の柳は河面をふゐて來る微風になぶられて、サワ〳〵と微かな音をたて、居る。其の一番の高い梢には十三夜の月がか、つて、時折のちぎれ雲に掩はれては其れが過ぎると、滔々と流る、河水に碎けて映つる、銀波金波を漂はして居るのである。此處神崎川の西の堤、往來も絶にた十二時過ぎ、其の寂しさは一通ではなゐ。

柳の根方に踞まつてしく〳〵泣ゐて居る一人の女、十九か二十位の年齢、身には中形の裕衣を着て、友禪と紫繻子の腹合せ帶を引懸けに結むで雪より白い、くつきりと繪にかゐた樣な襷足を惜しげも無く月に照らし

、パラリと落ちた鬢のほつれ毛をぶる〳〵と震はして居る。暫くすか
り泣の聲のみきこゑて居たが、軈て「ア、」と吐息を漏らしてハンカチと
つて涙を拭ひ、無意識に空を見上げた。
ア、思ふまゐ……これも親を見捨た不孝の罰で仏ゐませう、どう
ぞ御全親様れ赦し下さいまし……彼の様な不實な、沒義道な男と露
知らずにうまい口先に乘せられて、一生連れ添ふ夫と思ひ込んだがそも
〳〵の間違ひ、妾の誤りで仏いました……、ついした事から彼様中にな
つた時、れ兩親の呉々御意見下すつたのも耳に入らず、ます〳〵深はま
りした上句が身重に成つて、終に家を抜けたして來て女夫差向ひの樂し
い暮しもほんの夢の間で、吾郎様は自分が生み落した兒が不仕合せにも

死んで產れたので、もう用は無いと云はね斗りに家を外にして遊び歩く
了ひには何處へ姿を隱したか皆くれ行衛が分明らず、今更男に捨てられ
たとて生家へ歸る事も出來す、途方に暮れて泣きの涙で居ると、あの俊
藏様か種々慰さめてくれての親切づくめにうかと乘せられ、男は恐いと
思ひながらつい誘ふ水に身を任したら、是れも又人喰ふ狼男て、さんざ
我身をなぐさまれた上突放され、口惜いやら泣しいやらあぢきないやら
妾が馬鹿から斯様事儀に成つたと云ひながら本統に情けない……恨め
しいは吾郎様、捨てる程なら何故妾をれ欺ましなすつた　れ前を置て
他に添ふ者は無いなぞと　……　それにあの俊藏、人の弱味を附け込む
て、人を慰みものにするとは本統に鬼か……イヤ恨むまいこれも我身

が鈍なから、親に背いて淫奔した天の罰でムりません。お父様もお母様もどうぞ勘忍遊ばして下さいまし、生きてお詫びの致し様もムいません から汚れた此身を捨てゝ、黄泉からお詫を致します、重々不孝の罪はどうぞ、〈御免遊ばして……』涙に咽んで其のまゝ泣き伏した。

川向ふでは若者の夜遊び歸りとみゐて、濁聲で唄ふ流行唄が斷て續きて聞ゐて來る。

女はつと身を起して屹度川面を冴視た血の氣の失せた顔を月に映らされて物愴い迄に愴白い、悔むたとて泣いたとて今更取返しのつかぬ此の身若し人に顔視られでもしては耻の上の耻……噫、もうこれが此の世の暇乞れ父様も母様も……どうぞ不孝の罪をお赦し遊ばして……南

無「と身を躍らす一瞬時、

「危ない」と叫んで後ろから拘き止めた、

「どうぞ放してと……」身を悶く

「イヤ危ない、身を投げよふなんてや」と引戻す

「イヽエ生きて居られませぬ因果の身……と一生懸命に焦慮る、

「待つた〈譯があるだろが大事の命迄捨ていでも」と到頭引き据ゐる

女はなりも構まず泣き伏した。

何處で鳴いたか血を吐く杜鵑一聲

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「成程譯を聞いてみればお前様が死のふと迄なすつたのも尤だ」烟管を脂下りに噛にて手を拱ぬいて居るのは女を拘き止めた男で――何處やらの手代で名は連藏と云ふのださうで――女の頭から、ハンカチーフを弄つて居る指先迄もヂロ、、と視廻して、さて勿体らしい咳一つして、

「何が此れからが盛りの花をむざ〳〵と散して終ふとは余り無分別過ぎまさあ、まあ危ふい處を好擡梅に通りか、つて救助けて上げて、斯ふやつて家へ連れたつて歸つて何彼の話をきくのも、何かの深い因縁でせうから、私もまんざらの他人の樣にも思はれない、及ばずながら將來の御相談にも乘りませうし、又身の落ち着け方もた世話致しませう、くよくよ思は無いで悠くりとなさいまし」見かけによらぬ親切の言葉に、女は

たゞもう泣くより外は無いのである。

「エ、貴嬢のお名は何とか云ひなすたねつ……エ美佐……お美佐樣か、ハ、、、名からして美くしさうな名だ

美佐は涙の瞼貌にサーッと紅を帶びたさま云われぬ甚の美くしさに連藏は我れしらず恍惚となつて居たが軈て我れに返つたやうに、

「お美佐樣それでははなしてはどうでせう、余り事が突然だから斯と云ふ思はしい事も無いが、お前樣も私の家で何日までも遊んで居なされと云ふた所で、斯樣家に居なさらう筈も無からうしするから、追附け嬶も戻つてきませうから嬶とも相談の上で、何處かへ奉公でもなすつてはどうでせう……何の男の一人や二人に捨てられたからつてろんな事で

命を捨てやうなんと、馬鹿の骨頂でさあ、これからが花のれ前様だ、好處へだも奉公でもなすつて居なさるうちには、其の御縹緻なら前よりも好男の……先の情夫様はしりませんが……眞實意のある情夫が出來まさあ、さう成つてみなさい今の事を昔語りにするやうになりまさあね、ね、如何でせうさう云ふ氣に成りなすつちやあ！」

「ハイ誠にどうも濟みません、見ずしらずの妾をれ救助下すつて、其上昨夜から種々御心配なすつて下さいます御親切、此の御恩は決して忘れは致しませぬ。」

「何の恩の何のと云はれちやあ却つて痛み入りまさあ、袖振り合ふも何とか云ひますから斯云ふ中合になるのも何ぞの縁でせうよ」ポンと煙管

を火鉢に叩いた際、表の格子戸が聞いて「今歸りましたよ」と云ひながら昇つて來たのは連藏の女房のれ勝で、以前は何處かの涙水で腕を練ふたと云ふ履歴つきの代者らしい。

「れ待ち遠さま、つい先様で諒しが長くなりましてね」云ひつゝぴたりと座つて、男に何か眼まぜで知らす、此方も眼で何か答へて點頭いて居る。

「貴孃、御飯を喫つて下さいましたか、さう、何も無くつて濟みませんでしたね……ろれで貴郎、どうか將來の御相談が出來ましたかね」

「ハゝ今もさう云つて居るので何處かへ奉公でもなすつちやあ如何ですつて……」

「さうですね、それが宜ろしからう、ね、貴嬢、昨夜あらも亭主のと種々相談も致しましてね、本統に譯を聞いて見ればれ可愛想だから、どうか將來は好い工合にれ世話をして上げたいとねに」其處の長煙管をとつて煙草を詰めこんで、火をつけるや一息にすしつと吸ふてコンと擲く。

「本統にどうもすみません、大變に御厄介を掛けまして……」美佐は俯向く。

「何の濟むのすなまいのと云ふ樣な事ぢやあないんですから」と連藏を盼顧つて「ねに貴郎、若し此のれ方が奉公でも仕やうと云ふれ考へだつたら柚木樣の方が好からうと思ふんですよ、往くのがちつと遠方くなるけれど其の方が却つて此のれ方の爲に好かも知れませんよ……これ迄大きなお宅で孃樣でれ育ちなすつたてにんですあら、強い動きなんか出來やしませんからね、恰度柚木さんの方なら身体が樂でよろしいだろとね、さう思ふですが……」

「さうだね、彼家なら好いだらうよ、お美佐樣貴嬢はどうでせう」

「ハイ……是からどうせうと云ふ事も何處へ往かうと云ふ事も出來ません妾ですから……生家へ歸る事などはれ話しました通りの仕義で尙更出來ませんし……何處かに妾の樣なものでも使つて下さるれ家が在りますれば、どうぞ御厄介席にれ世話なすつて頂けば誠に結構でムいます……今仰しやつた其の柚木樣と云ふれ家は何處で、何を遊ばして居らつしやるれ家なのでムいます！」

「エヽ……ろれは……其の……香港でね……」と連藏は美佐の顔を視ながら、

「エッ、香港と云ひますとー」

「支那の香港でさあ、柚木のれ家は大變結構なれ家でね、内地からも澤山れ女中が往つて居ますが、何でも彼方で非常に大きな御商法をなすつ居らつしやるんださうで、彼方の立派なお官員樣や金滿家の旦那方が始終商方上や何かで柚木のお宅へ入らつしやるので、其のお給仕や茶畑草盆の世話位をやつて居ら好いのだと云ふ事で……つまり内地で謂ふ小間使てなもんでさあ……是非上品な好娘があつたら周旋してくれと豫々頼まれて居たんですから、貴嬢に御相談をするので、ちと遠方になるがおいでなすつちやどうですねー尤も給金なんかも内地での十倍も貰へるのださうですから、金でも溜める氣になりやうんと溜まりまさあ」

言葉の切れ途を待ちかねた樣にれ勝は引つ取つて

「それにねえ貴嬢、れ入でになる方々が皆れ歴々斗りですからね、ちよいと小間使に手土産を下すつても、金の指環だの、見た事も無い立派な着物だのをどし〳〵下さるんですつて、去年手前でお世話して上げて往つたれ娘さんでもね、今ではまるで華族の嬢樣の樣なみなりをして居るんですて、此間の書簡にもさう書いて悦んでれこしなすつた位ですよ、ろんなですから往きたい方はろりや澤山ありますが、第一上品で、可なりの作法位は心得て居る方で無いとね、先方のお氣に適りませんから仕

方が厶いません。貴嬢などでみますれば、遊藝も何も御存じの上に、御縹緻は好しれ優やかで居らつしやるしするので、往つて貰へますれば先方にどれ程れ悦びになるか知れませんよ」

今度は男が引取つて、

ろれで毎月一日と十五日と、日躍と大祭日なんかは屹度お暇が出て、小間使や中働や下女迄が皆で勝手に遊びに往つたり、内地から芝居でも往つてる時はそれを觀に往つたり、てんでに好きな方で遊ぶのださうで、月の中には何程も用をする日は無いのだつてました……貴嬢も今では斯樣場合になつて居らつしやるのだから、此邊位でまご〳〵して居なすつては、若し御明輩とかれ知已とかにれ出遇なさらないとも限られない

、其の際にはどれ程面目ないかしりやしませんぜ、ろれより一臂一思ひに飛越して、香港で一稼ぎ……と云つた處で全然遊んで居る樣な事で立派なれ身になりなすつて、お金でもどつさり溜め込んで歸つて來て、其れを土産にれ生家へれ詫をなすつて、以前の嬢樣にれ成んなすつた方が一番上策だらうと思ひますがとうでせう」

美佐は煙に卷かれて聽いて居るのである。香港と云へば知らぬ異境、そんな處へはる〳〵一人往くのは甚だ心細い次第で、躊躇する事の止むを得ない譯であるが、今も連藏が云ふ通り、此邊あたりでまご〳〵して居て知つた人にでも出遇つては面目も無い事ではあり、又一つには彼の吾郎樣が豫々上海か香港かへ往きたいと始終云ふて居たのだから、遇然ろ

こへでも往つて居たら出會はないとも分明らない、いつろ思ひ切つて往かうか……だがどうも心細い、如何したものかと千々に思ひ惱むで居るのである。

と視てとつたれ勝はすかさず切り込んだ、

「香港と云へは遠い樣ですが今は便利な世ですからね、全然れ隣りの樣ださうですよ、臺灣が日本のものに成つてからは尙々便利でねに、香港あたりでは日本の人が澤山〳〵往づて居りますから、內地とはちつとも變らないさうですよ、加之柚木樣のれ家などは皆內地の方ばかりで、れ上から下々まで四十五六人も居るので心細い事なんか微塵もないつてに事です……今亭主が申しました通り、貴孃が斯ふ〳〵で、何處ろこを

彷徨いて居るなど、つい新聞にても最かれて御覽なさい、親御樣にまで耻の上塗りをするやうなもんですからね、いつろ思ひ切つて遠方へお往なさる方が宜からうと思ひます、ろれも卒らい處へでも往くのならお勸めは致しませぬが、今云ふ通り其れは本當に結構なれ家なんですから、妾等でももつと年が若くて亭主が無い事なら無理に賴んでゞも往きますけどこんなでは仕方がムいませんのホ、、、、ねに、貴孃さうお極めなさい」

「斯ふ云ふ仕義に成つた交ですから惡い事は決してれ勸めはしません、まあ兎も觀も往つて御覽なさい、居心地が惡るけりや直歸つて來る迄の事でさあ、旅費なんかも澤山先方から出して來れるんですからね」

右からはをどすのやらすかすのやら、左からは結搆づくめに誰き立てる、追手搦手の改め上手につい落とされて、まだ眞實涙世を知らぬ美佐は往つてみる氣になつた、世には涙を溢して人の生血を吸ふ恐ろしい蟒蛇のある事を知らずに

「ろれではどうぞ宜敷」と答た時女夫の相格は崩れて了はん斗りに悅こんで、先づお祝いにと酒がはじまつた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

美佐は香港で醜業婦に賣られたのであつた初の中は身も蕩けん斗りに泣き暮らして居たが、どう觀念めたのか終には我れから進むで耻かしい事

をやつてのける樣になつた、噫、人生僅か五十の其あ間に、つい我れから投げ出した身の捨小舟、浮世の激涙にさらはれては何處の果まで沈み行くやら。

（おわり）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

青嵐

廣岡幽外

青嵐紫陽花月に動くなり
放たじの袂や月のあけやすき
杜若黑い燕の飛びけり
短夜を伊勢物語半なり
からき世やからき蓼など喰はゞ如何に

親愛なる諸君よ、我黨は更に第二の臨時增刊を起さんとす、詳細は末尾の誌告に見よ

小栗風葉君外數十名序跋
編輯主任　川村曲水
壽々夢詞
第二增刊　**曉**　三十六年一月一日　發行

元旦の曉色天れ如何に美
輝石外數氏の畫如何に麗
可愛〳〵の小珍本奮て購讀を賜まへ
新体詩、短詩投稿歡迎、可成本月中

幕風

太田梅塵

蓬々の草の故園や飛ぶ螢
萍の花にかくれて水馬
卯の花垣外の畑や瓜の花
斗酒を藏す我妻や賢初松魚
牡丹に高き夏書の椎かな
湯の道や百合紅に草の中
幕風や馬弓涼しき弦の音
掛香の越後に多き美人かな

さみだれ

樣女史

さり難き用のありて郎に別れ、家路に歸りて小窓に倚れば、さなきだに淋しき今日此頃、哀れさろゆる五月雨の音に、夜もすがらつれ〳〵いとゞ勝り行きて、くさ〳〵の思ひ胸に迫りつ、

晨の雲、夕べの雨、共に眺めし花子の君は、茲歳四月かりそめの床に臥して一夜嵐と共に、あへなくも散り給ひしと、何時霽るべしとも覺へぬ空摸樣、母なる君の悲しみ、雨の袂干くひまなかるべし、

大膳の池、日光の川、其樣去歳に變らぬど、背戸のみしちやんは兼ねて想へる七さんと走れりと、五月闇其姿を隱して、庭に小雨の音、末來の運命をさゞめく如し、

さわれ村の土橋は新に成りて車道は通しぬ、兄なる君は見を擧げて春風一家に滿てり、妾嫁して僅か一年、而かも變態斯くの如し、春風秋雨幾十年、故山の風景ろもや如何に

涙の音

如洲小史

一

河和を越して此處まで恰度三里、其間在りと在らゆる液体を集め〳〵て、谷に落ち、岩に奔り、其勢が漸く早く強く、小石を飛ばす程の急流を形ち作ると、一トうねりうねつて、大盤石を躍り越ゆる、と、見る間に奔流はサツと散つて、爰に河となる。

此河一種圖に無いくねり方で、草原をのぞみ、青葉の下を潛り、銀行の石垣、會社の土塀、艣（やか）ては船と云ふものにも打（ぶ）ツ付かつて見、橋と云ふものも負（ね）んで、濶歩（かつぽ）海へと急いて往くが。

さて數へて見ると情け無さの限りなりけり、銀行一ッ、郵便局一ッ、勸工場一ッ、橋二ッ、然しどふらい事には旅館、料理店と名の付くものが今では左りの指も折るやうにころなつたれ、漁船會社で失敗した智惠者、海水浴でもつこ揮を實際に見た才覺者、此川一筋、此海一ッ、岩、山、遠淺、白砂、孤松等がれ眼にかゝつて、年來の宿望を煙りに爲る者は多いが、何う云ふ物か矢張淋しい、浪の音、風の音、夜が來るとあんまさんが二人笛を吹つて往く。

高の嶺には天狗樣が棲んで厶るからだ、さうだ、此處に少し咄しがある。義朝どんが死んで呉れて、やつと世に知られた野間へ通ずる途一筋、鰯小屋の處まばら、斯うかなと踊つて居る磯馴松が五六本、此根を埋めて

、次の畑を沒して海水浴のふらふの有る所まで即ち町余、波の奴が連れて來て置て婆つた白砂が、風に吹き盛られて白山となつて居るから續いて、ぬつと突出た一岩山、天空を睨んで立つた大松樣、其葉露を受けた小社、夫れが高の嶺で、裏坂とこそ名は付け、坂ではない斷崖の、下は白浪狂ふ大暗照、此暗照が中々、二丁四面に渡つて居ると云ふ、甚以て怖ろしい。

其處に岡部太郎が靈、磯天狗、彼の人、迷神など奇怪な事が里人の口に傳つて、雨の降る夜やなど、宿舍に怖ろしい夢を見た事も度々有るか、余り云ふは神樣のたゝりが有ると云ふので有つた。

さらば、道路と云ふ道路、皆燒石のやふながら〳〵で出來上つて居るが

此處に蟹と云ふ奴、彼ちらへ走り、此ちらへ走り、雪隱、湯殿、床下、坪の内、殆んど蟹ならざる處なきと云ふ有様、之れが下駄を潜り、足に登る、蟻同様、眼にも掛けぬ更り、藪へ往つて此奴の充滿を見て、何事か天變の兆であると打叫んだうつけ者も有つた位。

白帆が大海原横過ぎて、磯に小蟹が鋏かざすは月の極好い晩、雨でも降つて御賢じろ、天狗様が握んで往かつしやる、高の嶺、ホー怖ろしい、皆の衆、濱へは余り出ぬが好い、前野様に今夜は講釋が有るちうよ。

此れで淋しい、矢張淋しい、道路には例の虫が何爲で居るやら分らぬ。此れを委細關わず、月が好いので釣りをと、一瓶の酒一重の肴と共に舟に乘つて、内海川を二人の若い男丹論老爺は口を極めてあらん限り、注

告を寄せたので有つたが。

二

さうれ前様盃差したちて、まふちつくらも飲めねェだから、ハッハッ、巳イ等だつて、受けるだけなりやァ、受けますかな。

爰にれ供廻りと云ふ舟業の新夫郎先生、早や陶然と醉ふた。

大体が呑める口で居つてさ、親父さんがさう言つたじやァないか、新は大變に左りがいけますてね、やり玉へ、ホウ一ッ二ッ見る無いね、

三ッ

舟の中にに憐れなものが太白を月に面して、潑漱と早や愕るの有つたが。

オールの將に水に入らんとす其婆勢を取つて、れ客樣の勝田學生は夫れをのぞき込む

五ツでがしたか、れ前樣酒は飲めるが釣は駄目だ、止れつせい、未だ〳〵此れからが……其

二タリと笑つたがザブリと釣糸を右手に投り込んで、漢潴寄する水の面をヅシと見入つて暫時、舟の側へ糸をくゝし付けると直ぐ、いやだとばかり、諸手を後ろへどつと突いて、仰いで高く天に熱い息を咄く

月も好いし

で、思ひなしに不圖斯うつぶやく、御座んなれと勝田學生、例のジロリ、ニタリを眠鏡越しに今一度

春さんを思ひ出すんだね

ハ……馬……馬鹿な、詰らぬ、れ前樣でも無ェ、罪でかすよ、止さつせいと言ふよ、春さんだなんて、彼れは死んだのでムいます

豈計らんや、意想外の周章狼狽、て、起き直つて手を膝に、正面をキッと見込む。

だつて、可笑しいじやないか、實際さう言はうもんなら、直ぐ向きになるんだから、ハ……矢張戀しいのだね、さうだらう。

と、充か戯談半分

が、若い人はいと眞面目なり。

暑中休暇だちて、學校のお休みには屹度一度ムらつしやる、れ咄しを

聞く、嬉しいでがすが、大体れ人か悪りいだよ、夫りやアれ前様、向ふだちて、知つて厶らッしやる仲でがすからな。

暫く、れのろけは止めてほしいよ、斯うつと、一時騒しかつた時から恰度四年になるかな

五年になるでがす。

能く覺へてるのだな、忘れてはなるまいだらう、がまふれ前四年になりやア、好い人が出來てるだらうに。

新太郎此れには應へが無かつた、即ち病床に接して、彼女が白き手を取り乍ら、臨終の細き聲を耳にした彼れの、今夜月玲瓏、碎けてはサッと散る銀波金波、船側を叩くさゝ波の音の外、抔盤狼籍たる船中に只二人

天涯無邊の大海原に醉ひ乍ら、微風に熱き面を吹して居る彼れ、今昔の感概ハ端なく心緒を乱して、で即ち無言なりけり。

勝田學生は意丈高になる。

れ前は言葉短かだから大に謂るて、最もれ前に取つては、狂せんばかり、悲嘆の突擊に相遇して、快活な性格に大變な折握を來したからであらうが、必竟つまらぬ咄しでは無いかね、宗教は決してお前、始終道德を維持しては居ぬよ、だが、從來何億万年、悲しい事には靈魂不滅の信仰が放棄せられると、社會は習慣上忽ち一時に暗黑となる、考へても見るが好い、信仰が若し進んだならばだ、宗教に於ける倫理の勢力は實際微だ、信に微た、宗教を尊ぶ、死んた人を信じて樂天を欠く

馬鹿な……

ハット氣付いて見ると、思はず高然と笑ふた。

此んな事をアハ……此んな事をお前にアハ……お前にワツハツハ悪かつた、持論だもんだから悪かつた、

新太郎先生うるさいと謂いた氣に消然と首を垂れて居たが言葉が限れると同じく、學生の大笑ひを輕く受けて、一寸釣糸にさわつて見る。

猶笑ひを續けて

難しかつた、斯う難しくては仕方が無い、けれ共、同じ事だね、死んだ人だの、神樣、佛樣だのを信じて居る奴等程、哲學者の眼から馬鹿氣たものは無い、さうだらう、　れ前が今の境遇で、　些と斗りでよい

から快活になつて呉れろと、年老いた親父や親母が朝夕思はぬ時はないと言ふに。

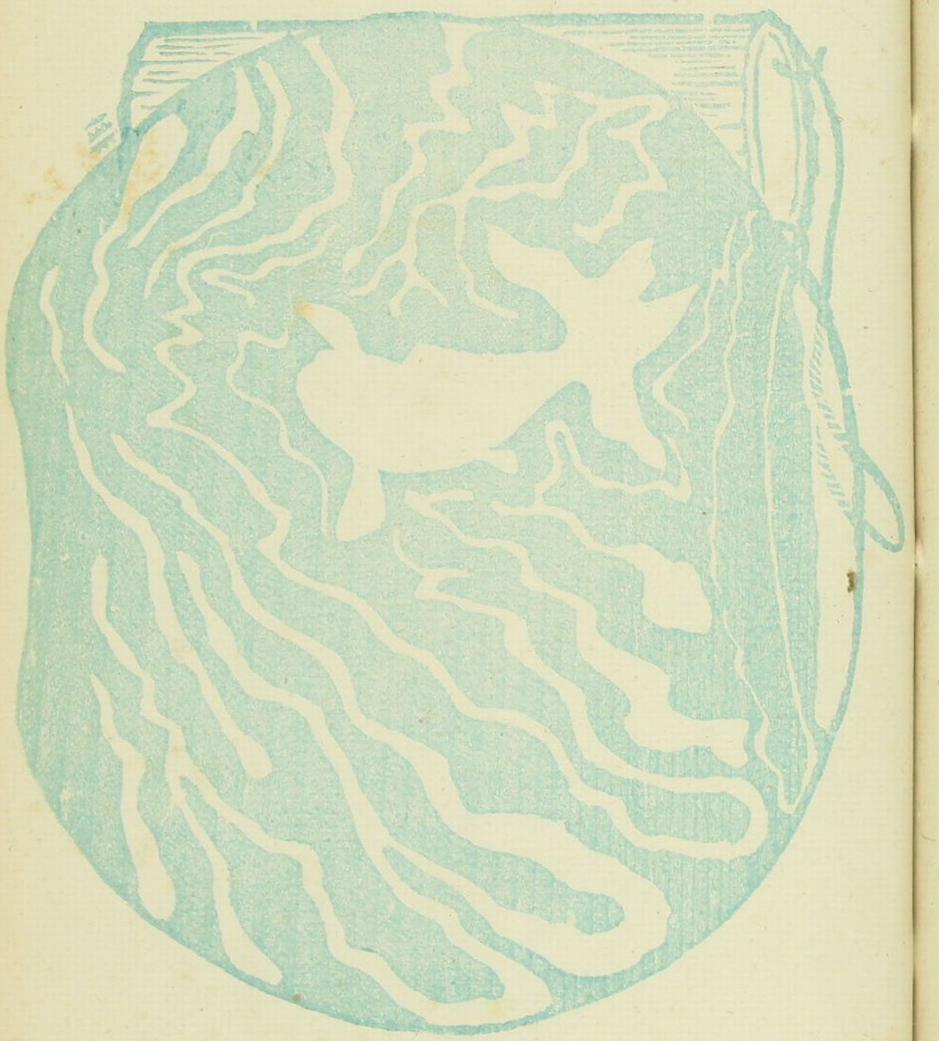
と前に返つて

れ前は未だ死んだ人を信じて念佛三昧に送くつてる積りか、僕は寧ろ宗教が理倫道德以外に人間天性の快活をある心情、抑制する事が間々あるのを噴ろらねばならぬ、然も來年お前は徵兵だど昨日親父が僕に咄した、若しも不合格やなんかで、はねられやふもんなら何うする氣が、所が所、商賣が商賣丈け仲間のもの笑ひにもならうじやないか、さうだらうさうだらうと限つたが、信太郎は暫時感服と云ふ体らく。

さうじやないか、今夜れ前を連れて來たのも、毎日墓参や何かで、

哀へて居る腦を健全にと思つたので親父も喜んで、御馳走をして呉れた、物騷な此海へ往く愛兒を看過するのも、皆斯ふ云ふ事が度々爲せたい爲だよ、久々でれ前にも舟を漕いて貰つた、明日からは何うか昔の信太郎になつて、今少し快活に暮したらどうか、さうして居ちヤァ直ぐ病氣と云ふ奴が出て來る、明日からはうんと一番若い奴等を愕ろかしてやつたら何うか。

勢ひに乘じて云ふは云つたが余りではなかつたかと敵手の顏を眺めて悪く取つて貰つては困るが、まァ能く考へて見なさい、向ふは死んだのさ、此世に居ない人さ、お前が熱誠の愛をさゝげても、草葉の蔭じやァ、何と思つて居るのやら分らぬ、夫れも以前主であつたとか、恩



人であつたとかならば兎も角、只の生娘で、他の目から見やア、今の世の中では隨分好い笑ひ草さ、大笑ひさ、ね。

アッハッと輕く笑つたが急にハタと止めて、

な、信公

解りましたゞ、私能く解りましたゞ、馬鹿な事でがす、形ちの、無ェ物に執着するなんか、ハ……止しますべい、見さつせい、明日からはすつかりと止しますべいに

云つたもの、月に光つた一粒の涙

若いや、ね若いや、未だ此れからだ、勉强するのも、大金持になるのも、お前の心持次第だから、人間は氣が大事に、体が第一大事

さうでがすオヽさうでがす

五郎先生我意を得たりと、愉快で堪らぬ、からまふ直ぐ

喰わぬな、まふ駄目なんかしらぬ、

と巻煙草に火を摺る、と消へる、舟がゆらり動く

危ない、ひどい風だね

不圖空を仰ぐと、清らかなりし雲、美しかりし月を今呑みなん、強弓に

かけた、古綿を、はちいて、切て、投げて、飛ばすやこに、一段又一段

、ほこりのやふな散雲は一面に空にひいて、や走るは〳〵出るは〳〵、

や知らぬい間に、いめ〳〵しい奴だ、お前様、早く歸らなきやならね

いよ

さうかね、オーどゑらい雲だ、好いか大丈夫か

糸を上ぐる迄も、實際落付いて急いて居る信太郎、櫓網を張つて突立つ

たが、目標に睨んだ鰯小屋の燈火目當に波を切つて一目散

雨がよこすかも知れましねェだ、お前様、用心して下ッせい

舟は流すに任せたもの丶、磯迄は一里に足るまいと云ふ目算、で漕いた

、漕いた、ひたぶるに漕いた。

三

薄墨を流して月曬なると見しは少しの間なり、墨汁のやふな黒い雲、黒

い雲は一重、二重、二重とかさなりかさなり澎拜と波立ち、風怒り、海

凄しくなると、目標に睨んだる燈火はいつしか消へて、舟益躍る。

東南と云ふ海路を計つて、始終腕のつゞかん限り、漕いて、走つてとは思ふて居るものゝ、更に危き事共であつた。

時に西北に方つて、伊勢の山々あり〳〵と描きて、海青く、波端白く、うづまく姿を見せて、失れが瞬時に磴と消へた一閃の稲妻。

と、直ぐ、ねどろ〳〵其に面に遠く鳴神、つゞいて雨が……

來たッ

と尻聲を空へ高く投げ上げた五郎の叫、さらばと今度篠突くとは体なりけり。

驚いて引被つた菰を透して、湯衣を透して、シャツを透して、すぶ〳〵になる、高く腕をかゝげ乍ら、櫓柄握つた信太郎が体の爰に凍らばや、

万本の氷柱は競つて下つて、無類の壯觀を呈すべうとゞ降るは降るは。

幸に此暴れでがさァ、今日限り内海川の彌平舟を見さつせい

と今樂天に變つて信太郎、されば漕ぐ程に、走る程に風は愈暴りて吹き飛ばされんばかり、はためきの一時チカリッと腦天へ持て射るやふな電光、どつとの波、さつとの波、山忍ち谷、爰に四邊、目をさへぎる物なき何万里の大海原、一葉の小舟は、もまれて、廻つて、上つて、下つて、たゞに形体有る限り、流れ流れ盡す。

若旦那、辛棒が大事だ、此んな風で驚くやふじやァと雨を呑んで、根限り漕いたが、恰んど二時間余り、西より北、北より東、東より南寄りに海をのゞみ、山を越へて走つた鳴神、ねどろ〳〵と彼邊へ這入ると、

雨は雨と名の付く程に成り、稻妻さへ遠く鍵形を彼方へ投げて、雲處々はげ、波治まり、海靜かになりにけると、

や、淵だ、とんでもねェ

何うした、淵、信公何うした

聲の下に舟は其處の岩を突ッ走つて、忍ちのうち淵に這入る。

內海川の河口より北へ五十町、上總岩の眞下に折り數く千枚岩の高さ六間、苔滑らかに、青淵張つた三光淵其處へ突と舟は這入るのであつた。

涙や、風の方は大丈夫だけんど、隱れ岩が有りまさァ、まふ少しの辛捧で、何うも手痛い目に逢はしやァかつた

まふ僕は生きてる氣は無かつたね、早い雨だ、からまふ濡れねずみで

氣色の惡い事ッたら、然し先づ一息だよ

袂から、裾やら、雨水と汐水に濡れ〳〵た衣の裏をしぼつて立ち上ると、月、ほのかに出ず、遙かに南の奇岩つゞき、コンモリと小高い高の嶺の上の大松の枝、其處から一導の怪火、竚つとほとぼしると見る間、妙に音響を引いて、頭上高く横切つたが、斯ふ云ふ夜には能く有る岡部太郎が靈なりける。

夫れと見ると信太郎はハッと伏して

オヽ岡部樣、若且那早く

と、聲震ふたり。

聞くならく其怪火の一度、鄉人の眼に入る時は、東西八丁、南北十三町

、内海の町中、人一人必ず永き眠りに就くと云ふ、然もれ通と稱して、
怪火の飛び行く際は、平身低、頭 神に祈らなければ害あると云ふ。
勝田は思はず頭を下げたが、是れど殆んど同時、高く水煙りを揚げて
前面に飛び込んだものころあれ。
飛沫をあびて、後へに倒れて、危やふく舟の履らんとする大浪を眤と視
入つた二人。

何だ

と、信太郎が口を開くと、無言の勝田はいち早く見るもの有り

舟を、舟を

類りにいら立つたが、水面に右手を伸すと、片手に握んで、つと引き寄

せた白いもの。
月は正面に照り渡りけり
奇しく點々たる黑岩の間から、今持つた右手に左手を添へて、握つて、
ひとしく船側に引付けたは、白い腕の屈折がくの字形りに成つた

人だァ

と、信太郎は高く叫んだが、

投身でがすか

と、亦怖る〳〵の覗き込む。

さうだ、確かさうだらう、其處の、お前は其處の肩の邊を持て、いゝ
か、とんでも無いものに出つ喰はした

と、双手を伸ばしてずる〳〵と船側をずり辷むと、ぐたりとなつて、まろび辷んだ一人の女。

信太郎は委細關わず、甲斐々々しう抱き起したが

緑の髪はさつと白ゐ頬を捲いて、うねつて、がッしと堅く結んだ唇、双の手はだらりと力無く後ろへ垂れたが、ともすれば胞が露はになつて、ふつくりとした乳房迄が見へるのを、後ろから膝に堪へて。

若且那見さつせい、未だ若い身空で、氣の毒な事つた。戻ら無ェか知らん

と、消然たり

爰に何を見たか愕然と驚ろいた五郎は、矢庭にット寄つて、女の手の物

を奪ひ取つたが、夫れこう月光をあびてキラリと光つた短刀なり

容易ならん、甚容易ならん

と、操り返しながら、再び女の双の手を取て高く一上一下。

オ、動く、動く、戻らねェか、若且那

と、せり上げたが

危ねいだ刃物なんぞ持てよ

と不思儀さうにじろ〳〵と美しい女の顔を見入る

戻らねいか、矢ッ張り駄目でがすか

勝田は委細無言に尚強く人工呼吸をつゞける

いけねいか、ェ若且那

黙つて居るがよい、今に戻るだらう、長い事は無いもんだから、しつかり持て

戻るでがすかェ、ェ若旦那、戻るでがすかェ

喧しい、黙つて居なさい

斯んどはうるささうに、で、息をはづませて、益、女の白い腕を双の手に更る代る高く低く振つた。

うつむけにして見るが好い、さうだ、さうして

一イニイ

と懸聲でしばし、と、ざつと眞紅の唇を突いて、一さんに出た水、水だッと叫んだ信太郎

占めた

旨い、大丈夫、しつかり爲なさるがゑいだよ

女はかつと水を吐いたが、ハツト苦しさうに腹を前へ突き出して、信太郎に、もたれかゝて吐く息、唇が微かに震ふと、ウーと一聲、軈て涼しい眼をパチリと開くと、其儘とととととと前へ泳ぎ出やふとす

どつこい危ねい、躍つてはいけねい事ッだ

と、引かゝへて

安心しねい、安心しねい、オイ安心するが好いだ

僕等は別に何うといふ者でない、通りがゝりの者だ、通りかゝりの者だから

と二人は急き込む

じろりときびしい目を釣り上げた女は、其儘にぐたりと爲て

難有り厶います、難有り厶います

やァ何處へ失せやァがつた、野郎太い女だ、先つきの雨じやァ、多憂が女の、地べたへめ入り込んで失やァしないか、濱傳いに野間の方、往け仙八、手前は西浦へ廻れ、即ち爰に一碧の空を割つて、すつくりと立つた上總岩の麓を廻つた提灯一ッ、二ッ、軈て三ッ四ッ野間口の松並木を明又滅と逢ふを見ると、女はかつとばかり立ち上らうとしたが再びよろけて、

れ助け

と、云ふとひとしく二人に向つて手を合して拜んだ愛らしさ、五郎は無言で微かにうなづいて見せる、

若旦那寒くなつたでがすよ、歸りますべい、ェ若旦那

と、信太郎は身を震はせたが、流し目に女の顏をば眺めなから、眤つと提灯の行手をれもんばかるやふ。

四

爰に先代から相續の御菓子調進所、寶餅の二字に尾張名所圖會の幾分を汚したと云ふ名物菓子屋、幾時頃か津島から起つて愛知縣下總体にまで羽を伸した揚句、ろの頃到る所と云程でも無いが、支店の數も其年十を滿ちて、五ッのお庫も何の爲めと人々に噂さされて居た家柄。

一番近い御主人で有つた喜右衛門殿、聞けば極めて圍碁好きの、初段に井目（せいりん）であつたさうな、夫れが大した事、津島から近郷限つて碁上手の險一と呼ばれて、其外に將碁は差す、長唄はいける、端唄はいける、素人淨瑠理の太十さへ能く語つたと云ふお達者もの、

猶聞げば觀音堂の懸額に、狂俳で卷頭を得つた竹影と云ふ大俳人も此人で有るさうな。

夫れが何う云ふものか、柄にも似ぬ、性れ付きの貧血性で、町内の新年宴會に海老喰つたが報ひ、胃出血とやらで床に就いたが、其時十四歳で有つた一人娘のお靜坊と云ふのと、合せて婆のれ菊を殘して、四十二の厄を見ん事打負けて、遂々黄泉の客と爲つた。

喜右衛門殿が亡くなられてからは、何うであらうと人の口端に上つた身代も、れ菊さんが大のやりてに、うんと腕に撫して前に勝る共劣る事無しと云ふ。

不相變御繁榮欣賀の至りと云ふ端書の前文

と、れ靜さんは去年阿父さんの七回忌を濟しと云ふ年阿母さんが鑑目で名古屋から婿に貰つた考三さんと云ふが、之れも思ひの外の勤勉家で、身上は益加るばかり、三國一のれ婿樣よと、近所合壁、裏長屋の井戸端會議にまで上ると云ふ始末。

大した御身代、大した御婿樣、大した御器量のお嫁子樣、大した阿母樣、夫れに又大したれ藏、大したお家大した店の人數、大した田畑、大し

た借家、若し鄉人に賓餅と云へば、直ぐ大したと云ふが通用語に爲つて持切つて居るのである。

が、榮枯盛衰は世々の習慣、

爰に孝三氏が不圖政事運動に身を入れて、不思議に寐食を忘れんばかりと云ふ一難事が出來した。

阿母さんが意見する、更に聞かぬ、親類から意見する、更に聞かぬ、夫れが導火線になつて、さしも三國一のお婿樣も、青樓の夢を忘れ難ねてや、ガラリと變つてある一方からの三國一と成り終つて、浪越邊りに好い人も有ると云ふ、可愛いやれ靜さんの目がうるむ時も間々有ると云ふ事になつた。

此うなるとさァ驕る平家は久しからずの本文通り

店の賣上に縮小を來したも御存知あらず、軈ては阿母さんの勤勉と反比例に、益遊びの募るばかり、がて〻加へて、れ靜さんは心配の度を越したか、肺と云ふいたわしい病氣を引き入れて、枕輕るからずと云ふ事になつたが、旦那樣は不相變、我れ不圖焉の長夜遊び、之れが骼じて所謂自暴自棄と云ふになつては、阿母さんが愛の極点は唯一人のれ娘子、れ靜孃に注集する良もすれば孝三の奴は、馬鹿、阿呆、惡物などの語が屢暫口を洩れる、夫れを亦好い氣に仕たやうなれ婿の動作、大体なら離緣して押つ返すのであるが、來年まふ五十と云ふ聲を聞く身には其んな事も面白からず、

何に付けてもれ靜、れ靜と、たゞお靜に明けてれ靜に暮れるので有つた。

銀行の通帳が山崎しづの名義に百の數を越したと云ふ夫れが已れの身代でもあるかのやふに、妙に心が染みて、假令ば少しの事にも直ぐ、泣く、笑ふと云ふ、全体活潑氣の阿母さんが、因盾の姑息の、加へて心經過敏の、雨の降る日やなど、弦齊の小説に泣かれる事も度々有ると云ふ。

爰に於てか一家の激瀾、店の輩が御主人をないがしろにして、恰度豊臣時代の武家諸侯と云ふ形、

阿母さんも昔のやうに店を守せられぬ丈け、愈跋扈して往古嚴格の風習もとんと無い

すると番頭の佐太郎、此奴がれ家横領の徒黨を組んだり、と云ふは、大事の婿殿に入れ智恵を買つて、盛んに遊ばせ、人も有らうに名古屋邊りの夫者許へ萬事方寸にありとて、寐泊りさせ、一方にはあらん限り、當代の女將を說いたので、其揚句、夫れから一年、親族會議と云ふ大變な名の下、美ん事婿殿の首打すて落し、其跡へころとと座りげり。

正は邪に敵せずと云ふ反比例に、れ靜さんはあわれ佐太郎を苦に病んで廿三と云ふ春、浮世の涙風にも當らず端なく親父さんの後を追ふたが、がつかりと氣落したのは阿母さん、夫れを又有らう事か有るまい事か、さんざんに主人の權力を揮つて、ある夜、一寸したいさかいの折に、突き倒したが、火鉢の角にした、が脾腸を打つて、夫れが元、終よ之れも

沒なる。

天下泰平安々と堂に上つた彼れは、翌年亦ある不都合を口實の下、十一になる小僧の三吉を責め殺したと云ふ噂さが一二の新聞に傳へられやふとしたが、金力は終に夫れを爆露するを免さなかつた。

狂せんばかり、いや實際に狂して居た其三吉の姉に當る、年比、山崎家の忠義者であるお勝と云ふが、天知る地知るの道理、お菊さんや三吉の死樣も薄々覺つて主の仇、兄弟の仇と、陰陽付け廻して居たが、三年前、佐太郎一家は、津島から内海に移り往んだと云ふ今夜暴風雨有り、堅固に之れ丈けの玄關を置て、さて說き出す、……前に控へたるは其忠義者れ勝さんなり。

怖ろしい海のさまや、不思儀にれ助けになりました、珍らしさに、今ではまふ、ハツキリと目が覺めたやふに、の心が決まりましたもので厶いませうか、胸の動氣も無くなりまして、氣が爽快と致しましたが唯今もれ咄し申ます通り、曰はゞ眞實お主や、弟の敵で厶いますのに全体から申ましやァ、れ孃樣の死くなりましたのも、夫れ元で厶いませうと、まふ全く私は狂人でムいなした

くすぶつた六疊の間の、昔ながらの圍爐裡に半身生乾きのまゝ、借着して座つて居る女、彌平、妻れ松、信太郎、圍く廻つて、座を組み乍ら、しつとりと首を垂れて居るのは以前の勝田五郎である

今朝早く名古屋出をまして、武豊迄、あれから山傳いに敵の家まで忝

りましたが、何分にも、門の内へ這入るのが、何ふもれくしてやつとの思ひで尋ねますと、留守だときつぱり申すではゐいませんか

ヤレ折角此處までな

と、彌平は氣の毒さうにしげ〳〵と女の顔を見詰める

ハイ、夫れから何うしても内に居るに違ひは無いもの〻　夫れとて私が今直ぐに、遇はして呉れと言つた處で、何樣是が非でも遇ひますまい、けれ共、案内さへ少しも見ず知らずの屋敷へ以て、なまじい女だてらに忍び込んだ所が何うぜ貴君

夫れは危ねい事んだ

と、今度は信太郎が言葉尻を取る

勝田は要らぬ事をと云ひたさうに、じろりと見やる。

此まゝ歸りますれば、此處まで來た事も夢になりまする譯、仕方がないと度胸が据りましたが、夫れは敵の佐太郎丈け打てば、假令母の墓へ暇乞ひが出來ぬにした處で、皆の奴に殺されたつて、ちつとも關わぬ、何うせ貴君始めから命懸けの、政府の手數を掛けまするは覺語の前でございますものから、居座つて膽太ふ、何うしても逢はして來れなければ、歸る事は出來ませんとゆつてやりをすと貴君

女は白い腐を捲くつて見せたが、白うふつくりした二の腕へ以て、鍵形りに黑うなま〳〵しい瘡が

之れでございます、澤山の男等が、狂人だ、乞食だとか由まして、遂々

女の悲しい事には、引ずり出されて失ひました

ウヌ、いめ〳〵しい、阿父さん、春田佐太郎は夫れだで好くねい野郎だ、まふ此處でも、悪くまれ者んになつてるだよ

と、信太郎は自身にも有るかの如く

が、女は耳にあ掛けず

世に云ふ鬼と云ふは此んな時かと思います位、身内の痛みが強くなつて參ります程、今に見て居れと、怨みが百倍も積つたのでございます、何うしても殺さなければ胸がすきませんので

さうだつたらうよ、夫リァ

と、思はず勝田は云ひかけたが、何思つたか、亦急に口に唖くんだ

女は不思議さうに見守りながら

私は思はず門に立つて睨み詰めたのでムいます、

幸ひに持參金が少々ばかりムいましたので、全体がまァ別莊のさふな作りになつて居りますから、其處の門番に少しばかり握らせて、全くは宅に居るだらうなと尋ねますと、始めは怖ろしさうに尻込みして居たのが、貰つた揚句、貴君僅かの金子で遂々すつかり喋つて失ひましたの、慾は怖しい物でムいます

矢張り宅に居たか

と、五郎は急き込む

イヽエ全くの留守でムいましたので

フン

と、思はず氣を拔すと

夫れが元、佐太郎の直ぐ下に居りました勘四郎と云ふ奴の指圖ださうで厶います、何處へ往つたと聞きますと、倉橋さんとかへ圍碁の會が有りますさうで今夜は必度遲くなるだらうと、斯う申ました

矢ッ張り運命かな

と、今まで默つて居たれ松は感服と云ふ体

夫れからと云ふものは、倉橋とかの家の廻りを、まふ歸るか、まう歸るか、供でもあるか、一人でかとうろついて、遂々日を暮して失いますと、直きに○に佐の字の書いた提灯、夫れ船ご御覽になつた

知てるでがすよ

と、信太郎はうなづく

夫れか何でも向いに參りましたか、這入りましたが暫くすると其提灯を先きに立て、出て參りました

フム

と四人は乘出す

後になり、先きになり　まふ此處等でか、まふ此處等でかと從いて往きましたが、夫れが恰度、何んでも十時頃で厶いませう、名高いので知て居りまする前野さんの横手へかゝりますと、夫れ際前の雲で厶います雷さゝ稻妻さゝ大變に强ふなつて參りました、別に這入る所も厶いま

せんので、二人の奴はあの時計屋の軒下にしやかんで　ふるうて居る
様ふでムいますので、まふ之れまで長い間、悪い〳〵何うかして敵を
打つてやりたいと思つて居りましたのが、店へ屆きましたか、私は息
成二人の前へ怖ろしいながら飛び出して失ひました
苦しさうに息を咄いて
すると貴君、私の顔を見ると直ぐ、引摺でムいませんが、斯ふ右の手
に握つて居りました刀が目に入りましたか、ワッと云ふと人殺しいと
大きな聲で吐鳴りながら、一散に雨の中を走り出したのでムいます
何てい野郎だよ
と、信太郎はつぶやく

斯ふなりますると妙に力が付きますので、一目散に追ひましたが、恰
度あの森の傍らで追ひ付きますと、待てと後ろから聲を懸けて置て、
思はず柄も通れと脇腹の當りを
突いた
殺しなさつたか
と、四人は更る〳〵
ハイ
自分乍らに今では何して私に斯ふ克く出來たと思ひます位、グーとも
スーとも云はず倒れましたので、
ハット思ひ直しますと、今迄の提灯が見へまぜん、始めからは屋敷も

放火してやらうと思て居りましたが、うつかりと立つて居る間に、貴君大變な人數で私しを追て參るでは厶いませんか、

追ひ詰められた揚句か、彼の怖ろしい、唯今聞きました上総岩の上から飛びるりましたが、彼いつらに捕われ下よりは余程勝しだと思ひまして……

夫れからは思ふ覺へありませんで申しますまい

感心に忠義だてよ、若い体でな、阿母さん

と、信太郎は惚れ〳〵と女の青白顔を見詰める、

斯うして助けて頂いた上、御介抱迄親切にして戴いた御思報じは又の世に致します、哀れと思召なら、何うか明日は名古屋へ出て、自首と

やらさしてやつて下さいませ、母の墓へ詣りますと、まふ夫れがわ名殘りで厶います

人を殺しては法律が免さない

と、五郎は名殘惜しげであつたか此聲を聞くと信太郎は絶へ入るばかり、涙もろいわ松は早やすゝり上げるのであつた

何しろ大變な事ンだ、春日樣の森に人殺しが有つたてよ、何うも斯うも哀れい噂さ何んでも追剝に違ひ無ェてよ

や、さうけい、道理で亦岡部樣を見ただよ

オヽ、吹くは〳〵

五人は聞耳立てる

サラ〳〵と裏の梢をゆすぶる風、夜は疾ふに明け放れて居たが、再び昨夜を復習する如き天候涙の音が此處まで聞へて來る

五

夫れでは此れがお暇で厶います、若し私しの噂でも、人様の間に出ました時には、名古屋の者で年が廿二、哀れな女であつたとれ咄し下さいませ、どうか、せめてもの罪滅しで厶います

門口へ出たれ勝は、行手の闇を突いて、坂牧にある母の墓へ詣ずべく武豊の停車場へ立つのであつた。

お前さん、まふ往くだね、探損が太い嚴しいだよ、氣を付けて往かつしやれ、

難有う厶います、御親切に送つてやらうと、御二人様まで添へて下さいましやア貴君、別に御斷も失禮と、何も申ませんが、御恩か空怖しう厶います

何しに好いだよ

と、信太郎は今日同じく名古屋へ歸ると云ふ五郎と共に河和まで見送るのであつた

夫れでは

オヽ往きなさるか御前さん

何しにも泣く事ア無いだ

己ア娘ッ子のやふな氣がしてならねいだよ、信や見送つて上ッさろ、若

旦那にもお願申てな

フーム

三人は雨の降る、飛沫の中を立ち出でたが、闇い中に明い光りを面に受けて、老夫婦の見送るを見ては、前に悄々たる女を見て、又しても涙と云ふものが落ち下るのであつた。

門から五丁、だら〳〵坂を下り盡すと、例の春日の森へ出る、此處等かと三人は無言の内に思はず慄立したが殊更にれの丶ひたらしいはれ勝であつた。

先程からの雨は横になげて、桐油の間から　しつとりとなる、親父が與へて呉れた笠を愈深うして、今町放れを出やふとすると。

待てッ、女ッ

と、雨にびいどろののれん涙立つを見せて、提灯一ッ何處だ

と、二ッ

此處だ〳〵男が居るから、皆んなか來い、三ッ、四ッ、五ッ、六ッ、

○に佐の字の提灯は俄に此處にも彼處にも、點々して、サア逃げよとばかり。

失ッた

と、勝田は味んで見たが、既に飛びか、つた一人、矢庭に信太郎ば其男の横面を張りのめした、

さらばと三人は雨を乱して、一目散に邊らの林へ。

大事だ、信太郎、れ前はれ勝を連れて逃げるが好い、昨晩も咄して置
た前津の、好ゞか、ェ往け、跡は何うでもなるは
と、一喝、が見る間に提灯の光りは螢の飛ぶが如けん白い服着て劔提げ
た人さへ、一人二人交つて居た
ェゝだかね若且那
已れは何處へでも往く、れ勝の望みの屆くまでは、夫れが大事だ、
サァ早く
此處だ
往け
三人はサッと散つたが、梢を縫ふ提灯は、益繁く、眞近くを右往左往、

若且那はゑいだか知らねいが、何うにか逃げさつしやるだらう、れ勝
さん、をんぶさつしやろ、ェをんぶさつしやるが好いたよ、大丈夫、
山道は已ァがようく委しいたから
と、背を向けて府向いたが、思ひなく、女はハット手を肩へ伸すと、よ
いしよとばかり立ち上りなから、今日始めて昔の力量を出した大の男、
サッと木立を潜つて、其處の坂を走り下りた
風は吹き荒るる、木の葉を散らす、雨益降る、二人の往手は定めて險し
い山であらう

（完）

夕顔

尾崎冬二

夕立は晴れて小庭や蟇
涼しさの橋を渡れば杜若
カンテラや茄子新らしき夜の市
時鳥卯の花垣の朝くもり
短夜や椽に蚊遣のもゐ殘り
萍やうたかたのよる花の影
夕顔の二尺の垣や百合の花
子子の蚊となるなれや夕暑し

濱撫子

服部綾足

つみためし濱撫子の花を手に沖の小じまの晝のつき見る
ほのぼのと夜は明けそめて知多のやま波の穂の上に眉引ける見ゆ
あか星のかげ踏む磯の朝ありきほの見し人と逢ひにけるかも
潮あむる人の横顔亡き姉に似たるもゆかしくにや聞かまし
簾戸越しに海見やりつゝ海士の唄うち聞くほどに夢に入りにけり
歌たまへあやふき磯の岩よぢて君にとつみし濱ゆりのはな
くゞれ海やよ打ちよせて洗ひ去れ戀ひ忘れ貝拾はむやわれ
御贄棚かきて仕へし磯やまのろなれ松が枝まつむしの鳴く

青すだれ捲きあげきせて風をまつ浴衣すがたの若き子やたれ

千さを吹く沖つさよ風身にしめてろゞろあるくに月ふけにけり

海くれて波のおとたかくなりにげりありし帆影よいづちいにけむ

旅なれや鯛釣りぶねのふなはたを枕になしてうまいせりけり

おぼにつる海士の小唄の一つ二つ低く試む醉ごゝろかな

海のさちけふさきはひて大口の尾ひれのすゝき釣りてかへらむ

こを題に歌はむとして成らざりきうしほにひゞく磯寺のかね

夏日偶作　　中川五竹

午眠乍覺暑如烘、　時聽遠雷鳴晩空、
怪來身在水雲中、　一雨新涼清徹骨、

服部擔風曰、涼意滿楮、

夏日山居

竹聲松韻遠紅塵、　幽草青苔偏勝春、
清風明月不知貧、　誰道山中無樂事、

服部擔風曰、雅潔可喜、

中秋賞月　　横井蕉園

雨霽天如水、　舉杯待月來、
微吟賞良夜、　倚盡最高臺、

服部擔風曰、　造句穩愜、

踐約良霄邀舊盟、　南樓置酒坐三更、
秋到平分最有情、　賞心不睡月明冷、

服部擔風曰、　三四可誦、

夢登富嶽　飯田楊柳

夢驚溟鵬上別寰、　玲瓏嶽雪白雲間、
此是扶桑第一山、　雲間屹立三千丈、
八朶芙蓉空際橫、　天風浩浩白雲生、
秀色玲瓏終古清、　夢餐絕頂千秋雪、
白雲蓬渤脚尖生、　旭日曈曨掌上明、
唯見群峰如蟻垤、

水粘天處此蓬瀛、　環珮鏘々笑語空、
神仙遙認五雲中、　午夢無端化胡蝶、
步虛聲裡御天風、
一榻香消頹篆煙、　阿誰清夢絕塵緣、
通體玲瓏人欲仙、　芙蓉峰頂御風去、
欲向蓬萊謁嶽神、　仙童招我笑聲頻、
夢破復爲塵界人、　天風吹落三千仞、

服部擔風曰、　如讀樊榭遊仙諸詠、　使人神魂縹緲、

白蓮

石原一字庵

蓮池をめぐる徑や杜若
無花果の樹形濕りて穗蓼哉
水音や螢に更けて水鷄川
畑道や蔓這ひ出でゝ瓜の花
石段や日傘傾く椎の風
長橋の瀨田の五月や雨暗く
葉かくれの桑の實黑む小雨哉
雨黑や椎の木原のほとゝぎす

無弦琴（斷扁五首）

きんせん

名は重くて塵に緣あり
風船輕くて宙に飛ぶよ
才人かよわき翼を振つて
危く榮華の空をかける
寧ろ若かんや鎭守の牡に
愚鈍の鴉に頭は踏まるも
辱血汐ににじむまで
痴愚なる姿婆を罵るに

○

夕暮野邊のそゞろありき
弦月光も夢の如く
暮雲の影に眠る時
何ぞや淸き音空に溢れ

二度三度近く遠く
仰げど暮天の色はさびて
影さへ見にぬば何の鳥ぞ
ひろかに恥づるよ才も無き
甘きに集ふ蟻の如く
名聞の影を追ふに疲る

○

藝妓化粧にみめをつくろひ
詩人は筆に情を飾る
おもしろい哉現代の姿
こゝに年少のなまけもの
うらみに満てる小さき胸は
涙をつゝじにあまりぜまく
流れて凝りて歌となる
〜らべひくきに顔はろめず
詞いやしきを耻とせず

ゆるぜよ野調きくに堪へぬを

○

長閑なる哉春は醒めて
緑にけぶる野はかすか
見ればたのしげ花は笑むに
我に何ぞや戀多き
思ふよ心は虹の如ぐ
榮に溢れて色新に
淫世の光にあひし時を
うぢめし涙に弱き子に
とはに苦悶の途に鞭打つ

○

時は流れて冬去りて
陽春人をいたましむ
まばゆい哉や佐保姫の
化粧もこりてあるかなれど

人間終に春ならず
花散る夕たゞ一人
慰もなき身をなげき
思あまりて胸だきて
春雨細き戸に凭れば
無心か雨雲南風に走る

夏夜　江村　楊柳

晩來微雨霽、　風動水聲清、
繫舩垂楊岸、　有人踏月行、

掛香

三笞落魂居

よき朝の藍の香ぞする軍衣哉
牡丹や人ものいはず病の間
五月雨やかりに香を焚く煙草盆
夕日さす芋の葉かげや瓜の茶
よるべなき身や萍の水に花
平凡の世を只蓼のからき哉
飛ぶ螢うたんとぞ思ふ團扇哉
徐ろに掛薫す裾さばき

一筆啓上　罪の子

時下燈火可親の候益々筆硯御多祥奉賀上候、

蕪誌青すだれ延刊茲に二ヶ月未曾有の失態轉た恐縮の至りに候、好んで延刊致すには無之候へ共罪の子の境遇上亦止むを得む「幸に左記御一讀賜り度候

新愛知東海日々霞其他二十余種の新聞雜誌に依て蕪誌發刊の豫告を報ぜられたるは已に「五月雨や掛け所なき青すだれ」の候、世上同好の熱心家東西相應じ南北相和し來り投ぜらるゝ者無慮千ページ、幾多の詩集原稿不足を告ぐるの悲況に於て吾人の喜悅之れに不過候、中に就きて其英を探ぐり各一編を採りて二百ページを滿て原稿を金城社に渡したるは正に七月十五日にて候ひき東海の首都柳城の地に於て文學的册子として見るべきもの誌友春江太田益三氏が其作品を集めたる幹外の小筒を除きて他に好箇の書に接せず、幾多の雜誌瓦解して落漠の甚しきを嘆ぎて茲に臨時增刊を起す、西野某會社等の手に委せんか、價廉迅速旬日にして成るべゝ、我れ愚なりとも知らざるにあらず、唯難產の醜名を傳へらるゝとも他鄕の臺に上るを欲せず、俳句の撰擇に就て山

高雨聲子を煩したる緣故により、半面の誌友舊雀會の發起者友淸友靜氏の實家金城社に依したる次第に候、

果然同社の多忙は終に延刊せられたり、多少の遲延は豫じめ告げられだる處、薄利多煩なる雜誌印刷の爲めに他の有利事業を抛たしむるに忍びず、加るに九月に至ては小生修學の專問某學校進級試驗に際し、又誌業を見るの暇なく遷延終に今日至り候、女子的根性を有する某子は小生を目して醫學校落第生と中傷致され候、僥倖にも某校の首席を占め忙間を割きて登校する者誌務の爲めに席を讓らんか世上の嘲笑思ふに過ぎむ、之れ諸君の厚情に背きて蕪誌遷延の茶因に候

素より際物師的商賣的ならば其實業を抛ち自已が修學を捨て一意之れに從ふべく候へ共、左程の狂熱末だ無之校正の粗漏伏して其罪を待ち候、

東都に於て大澤天仙、山高雨聲、立松輝石、柳城に於て伊藤天琴、服部擔風、村瀨美胤、北尾如洲及熊本の近藤雲外等諸氏の好意、又貴重なる紙面を殆ど連日割愛せられさる扶桑中京二記者の盡力乍誌未御禮申べ述候

或人は本誌序跋の飾りなきを告げられ候へ共之れあればとて鱧が鯛になるにもあるまじくと存ず少〜も頂載不仕はぢがき一編にてお茶を濁し候、尤も第二增刊「曉」には東西の諸大家幾千名序跋を既に賜り千紫萬紅各芳を競ふべく候、

本書に對し批評を賜りたる諸誌は各其寄贈よ預り度、猶本書御入用の諸君は殘本僅少に付至急御申越相成度候

終りに臨んで申すべきは、近時不肖を以て編輸員顧問員等に推撰廣告相成る雜誌社有之候へ共三兎を追ふの黃吻兒何等の造詣なく其御好意に背き候段平に御海容賜り度候、學成り業就ぐる迄は壽〻夢詞一つの維持さへ困り居る身分、當底他所樣の御厄介にならん事思ひも依らず候　頓首

附記　本誌寄稿中天琴如洲の二子は各臥床中の執筆、又花東一佳子の俳句山挽子君の排する處なりと雖も當人の天狗に免じ且つは餓鬼と呼れたる御禮の印として其畫の裏に揚ぐ、其正否は一に世評に任せむのみ

明治三十五年十月二十八日印刷
仝　年十一月一日發行　（正價廿五錢）

愛知縣東春日井郡二城村大字大永寺三十貳番戸
編輯兼發行者　川村泉

名古屋市榮町貳丁目十一番地
印刷者　小木曾銀一

仝　市榮町貳丁目十壹番地
印刷所　金城社

名古屋市京町四十八番戸
發行所　壽々夢詞會

名古屋市玉屋町八番戸
本誌賣捌所　壽々夢詞會編輯局（特電話九百七十八番）

兵庫縣加成郡北條町（舊交友會）壽々夢詞會第一支部

名古屋市玉屋町一　靜觀堂　仝　市鐵砲町二丁目　三輪玉潤堂
仝　金華堂支店　仝　市門前町二丁目　耐成堂
仝　町三　永東書店

名古屋市京町四十八番戸
酒類洋品問屋
飯田藤七
商號 伊藤勢

中京唯一青年雜誌

壽々夢詞

自第一聲至十一聲

摘要目次

第一聲

表紙画 藤村貞一
發刊之辞 飯田楊柳
罪の子 小栗風葉
墟濱月夜 太田春江
すゞむし 飯田照子
飛鳥川 川村曲水
秋の夕暮 進藤扶桑
醉心錄 服部擔風
菫園歌話 服部綾足
壽々夢詞 高木蛙月
今宵の月 電公散史
珍痴魯倫 京童

第二聲

與友論柳城文壇書 大橋青波
月夜逍遙 新田清灣
枯野 谷口東郭
旅からす 伊藤天琴
流星 加藤紫溢
晩秋 小出梅枝
芙蓉 中野紫硯
秋思 廣間半戴
寂夕 見田鉄南
讀第一聲 平野羊大
辨忘 飯田楊柳

第三聲

表紙書 大平公墨
祝歌 粟田廣治
俳諧史上の尾張 山高雨聲
雪の敦賀 大橋青波
寡婦 谷口東郭
行水 飯田楊柳
愛の子 伊藤天琴
逸題 太田春江
華山翁戯作の序文 鈴木藏山
新年宴會 新田靜灣

第四聲

表紙畫　立松輝石
文壇革新　飯田楊柳
イリヤッド吉川曾水
樂天居　伊藤天琴
八風越　大橋青波
春吟　川村曲水
中山七里　中根紫陽
梅盡　沼波瓊音
醉心錄　服部擔風
梅遠近　無形會
秋の夕暮　進藤扶桑
愛の力てんきん
小春日　沓水子
湖上の雪　京童

第五聲

大橋青波に與ふる書
濱風　立松輝石
諧墳暮　大澤天仙
神の惠　新田靜灣
暗明　山田松琴
たもひつ記　伊藤天琴
横井也有　村瀨美胤
我儘記　山高雨聲
募集俳壇　日比野寛
桃櫻　岡野知十
海　無形會
井戸田里　飯田楊柳
夏だより　谷口東郭
川村曲水

第六聲

大附錄隅田川の景
人生は何ぞ　立松輝石
緣衣の美人鍵　沼波瓊音
今亡き爺　谷磯北
海　北尾如州
井戸田里　飯田楊柳
自轉車詩味　谷口東郭
綠庵の記　大橋青波
柳橋漫吟　中原指月
春詩　村瀨美胤
文學雜誌の挿畫に就て　伊藤只聽
露の命　五榮堂主人
蟬羽

第七聲

熱情觀　黑田湖山
自嘲自笑　鈴木默庵
秘密室　飯田楊柳
紅　川村曲水
意變　岡田青柳
岐阜行記　立松松枝
別れの歌　太田露香
鶯笛　尾崎雨二
短詩　伊藤只聽
花一枝　立松松枝
告天子　飯田照子
星一つ　五味菱洲
罪の子　國井礎水
東だより　五榮堂
東西南北　X光線史夕鶯

第八聲

春光　太田春江
南宗畫論　立松輝石
朝ぼらけ　新田靜灣
我が名　伊藤天琴
井戸田里　谷口東郭
湯の川竹　森本骨太
白百合　伊藤只聽
柳橋漫吟　村瀨美胤
歌反古　服部綾足
子子集　花東一佳
暮春曲　中野渚子
寂　百木麗々
詠中京文士（以下逐號）　罵詈仙
母なき子　伊藤只聽

第九聲

南宗畫論　立松輝石
留守女房　小栗風葉
たもひ出　近藤雲外
寒風韻　中野渚子
毒舌　飯田楊柳
滿吟十句　百木麗々
腰喝錄　花東一佳
野調　小出梅枝
春野　見田壽枝
青簾豫告　飯田楊柳
編輯閑語　川村曲水
友聲（連聲）抄錄　花東一佳
星　伊藤天琴

第十聲

表紙畫　中村鈴子
霜がれ　大澤天仙
晩春　小出梅枝
失望　伊藤天琴
柳橋漫吟　村瀨美胤
梅二輪　池田錦水
笛童子　伊藤只聽
雲見草　無形會
なげき　永代僊溪
初夏即事　飯田楊柳
五月雨　立松輝石
山百合　服部綾足
新世繼橋　近藤雲外
青梅　三宅梅園

第十一聲

朝花ちゃん　金子蕉園
露草　山田松琴
柳橋漫吟　中根紫陽
我と樂天　村瀨美胤
長春記　佐藤一水
松濤錄　中野渚子
避暑漫吟　立松晴濤
每號執筆画家　伊藤天琴
東京　立松輝石
名古屋　伊澤沍玉
亀山兎眠
五味菱洲
森川貞吉

投稿歡迎

一行三十字詰明細に認め各種別記の事

一部七錢每號五十頁余

每月十五日發行

評論美文韻文詩歌俳句
小說各隨意
投稿採用の雜誌進呈

第十五聲

一周年の紀念として本月三日發行す　要目は

表紙畫　亀山鉄幹
渡頭の別　曉星子
黄昏　長瀨柳塘
れ露　服部綾足

圖書館設置

識者の間に唱導せられて成らざりし圖書館は却て白面黄吻の吾人が手に委せられたり。　位置は名古屋市門前町「大須門前」百〇五番戸

開館は月曜及大祭翌日を除き每日晝自午前八時至午後五時　夜自午後七時至午後十時。　細則は郵券二錢送付次第進呈す

會員は　名譽　賛助　正　準に別ち特別の待遇をなす

藏書は三千余部最も饒多にして規律完全なり

斯界同好の青年淑女願くば半日の閑を割きて本館を訪ひ　來て微學を援け永遠の計を立て以て吾人と憂を同ふせよ

明治卅五年十一月

柳城青年會圖書館

5. 8. 17

壽々夢詞第二臨時增刊

新体詩集 曉

序文　小栗風葉君、黑田湖山君、遲塚麗水君、大澤天仙君

紙質善良印刷鮮明上等全紙六號活字体裁高襟紙數大約百頁一部代金十五錢但郵税別不申受

金子蕉園君、登坂北嶺君、原霞外君、沼波瓊音君、曾根芙蓉君、所眞澄君、村山漂浪君、菊池曉汀君、林古淨君、武田吐虹君、山高雨聲君、上田龍耳君、山地白雨君、伊藤天琴君、太田春江君、村瀨美嵐君、新田靜灣君、花東一佳君、山田松琴君、中野紫硯君、服部綾足君、近藤雲外君、香取花舟郎君、飯田楊柳君、執筆

（繪畫）　立松輝石君　龜山兎眠君　五味菱洲君　外數名

編輯締切　十一月十五日　主任　川村曲水

發行所　名古屋市京町四十八番戸　壽々夢詞會